78
69

戸澤姑射
淺野馮虛 共譯

始

文學士
淺野馮虛譯

帝國圖書館藏

沙翁全集

第三卷

ヴェニスの商人

發兌
大日本圖書株式會社

明治四十五年五版

大正
2. 3. 12
購求

「ヴェニスの商人」序

沙翁　聞けば、日本國の大家達が今日集會を開き「ヴェニスの商人」の譯者を引出して、詰問やら、注文やら、敎訓やらを致すとやら。さぞ名論卓説とやらが數々出ることであらう。ストラットフォードの寺院生活（おてらずまゐ）もいさゝか倦（あ）いた程に、これより傍聽に出向くと致さう。急いで參った程に、もう爰ぢや。や、會議が正に始まる所ぢや。善い所に參りあはせた。

英學者　諸君、大概人數も揃ったやうであるから、我輩か

ら先づ鄙見を吐露して飜譯者の參考に供しやうと思ふ。凡そ飜譯の第一の要義は一字一句をも忽にせず、最も忠實に原作の意味を傳ふるに在る。勿論彼我の語格に相違があるから、多少の自由は許すとしても、出來る限り原文に據らぬは不都合である。原文と離れた譯文は、例へば實物に似ぬ肖像畫のやうなものである。三文の價値がない。然るに遺憾ながら近來我邦には、此種の飜譯が流行するやうであるが、前途の爲めに大に寒心せざるを得ぬ。何うです、本篇の譯者は、この點の用意が充分屆いて居りますか。

英學生

僕も英學者先生の御高見には、双手を擧げて賛成しまする。一般に飜譯なるものは、單に譯文として讀むばかりでなく、原作を讀む時の參考にもなるやうに願ひたいもので。

實用家

君、それは廢し玉へ。沙翁などゝいふ陳套いものを讀んで、決して英語の力はつきませんです。三百年前の英語を、今日の英語と同一物と思って居るなどは最も大なる間違てす。今日此實用の世間に立たんとするには、萬事實用的でなければいけん。沙翁を讀んで第一英文の手紙が書けますか。この多忙の世の

中に生れ乍ら、何故に斯様な飜譯をするか、僕は先づそれから譯者に詰問したいです。

文士　其様な議論には困る。太陽の光で飯が炊けぬから太陽の光は炭に劣るといふやうな議論、君は今日の會議に出席の資格がないですな。さて只今英學者氏のお言葉に由れば、飜譯の第一の要義は、原文の一字一句を、忠實に傳ふるにありと言はれたが、我輩の眼から見れば、之は未だ一を知って二を知らざる皮相の見である。我輩の見る所によれば、飜譯の最大の目的は、原文の妙味を邦文の上に傳ふるにある。從って、外形よりは寧ろその内容、辭句よりは寧ろその精神に重きを置かねばならぬ。譯文は決して原文の奴隷ではない。獨立的價値を有するものでなければならぬ。單に辭句の末にのみ拘泥すると、其譯文は多くは晦澁、生硬、一點の生氣といふものが無く、原作に在りて、火を吐くやうな抒情的熱語が、譯文の上には、たゞ其外形のみを留めたる死語となるやうな場合が決して珍らしくない。かゝる譯文こそ三文の價値がないと我輩は思ふ。足下の今言はれた肖像畫にしても、單に頭や顔の輪廓が似て居るといふ丈では不足

ぢや。その人物の眞面目―成るべくはその精神迄が躍如として露はれんければ、決して肖像畫として上等のものとは言はれぬ。何うぢや、本篇の譯者は、此點の用意が届いて居りますか。

小説愛讀者　アラ妾もそれに賛成で厶いますわ。飜譯物といふと、大抵皆ゴツ／＼して、讀み難くて、面白くなくて、睡氣がさして、肩が張りますから、折角買つても、二三枚讀んで止めて仕舞ひますわ。此御本はスラ／＼書いてあつて？

樂隱居　序でに名前なども日本流にして戴かれますま

いか。ポルシアやらバツサニオやらでは、露西亞の軍艦の名のやうで、記臆されはしませぬ。分捕軍艦でも日本流の名前に改稱したでは厶りませぬか。成るべく分り易く書き換へてください。

躍起家　それには僕に名案があるです。實は分捕軍艦にも僕が立派な優美な名稱を附け換へて置いたてすが、海軍省に上申しやうとして居る中に、平凡な名を附けられて仕舞つた。「ヴエニスの商人」の人物ならば、先つ斯うですナ。アントニオならば、上のアントを取つて安東とする。日本人は氣が短いから、名前などは

短かいに限る。それから高利貸のシャイロックを豺六などは名詮自稱頗る甘いでしやう。ポルシア姫を保留子姫、腰元のチリサを練子、饒舌家のグラチアノを愚良地、好男子のバッサニオを、チト苦しいが迫間、チェシカ孃をお鹿孃などゝするです。さうすれば、原名も思ひ出せるし、又呼び善くもなる。一擧兩得とはこの方法です。若し本篇の譯者が、まだ爰にお氣がつかれなかったら、讀者の方で僕の流儀に勝手に名を改稱して讀むべしだ。既に西洋人が日本語で談話をする筈は無いのであるから、名前だつても日本流に

改稱して少しも構ふことはない。飜譯者もこれには御賛成でせうな。ハイカラ黨は不賛成かも知れぬが……。

西洋通　ハイカラ黨とは何んの事です。西洋の名前が記臆されぬ位なら西洋物の飜譯などは手にせぬ方がよい。慾にはせめて五度七度は、西洋の劇場なども覗いた上でなければ、沙翁の讀者たる資格はないと言つて善い。

劇通　イヤ何にも、さう西洋〱と、醫師が患者に對するやうなことを言はんでも善い。西洋の芝居を云々

する前に、日本の芝居道のことを、チト修業して戴きたい。科白の呼吸、故人の型、音曲の配合、能狂言との關係等、中々容易に分るものではない。先づ是等につきて少くも五七年苦勞した上でなければ、芝居の事を論ずる譯には參りませんな。況して脚本の飜譯などが出來ますものか。よしや飜譯したとて舞臺にはかゝりはしません。譯者と役者とはその間に自から一種の關係がある……。

評論家　眞面目の議論の席に駄洒落などは廢し玉へ。余は今迄默って諸君の御說をたゞ拜聽して居ました

が、兎角諸君は、沙翁の飜譯といふ事を忘れて議論するから困る。物には皆輕重本末といふものがある。よく之を辨へて、その重き所に眼光を注がねばならぬ。諸君の御注文は敢て皆不必要とは言はぬ。が、何うも最大の急所を見落して居る。沙翁は言ふまでもなく天下無双の大天才で、その作を見れば、詞藻といひ、趣向といひ、前後の對照といひ、又舞臺面の配置といひ、漫りに他人の追隨を許さぬものがあるが、その最大の長所は、人物の性格の描寫である。沙翁劇は性格劇である。之を土臺として一篇が成立するので、之を除

去すれば、幾多の無理、矛盾は陸續輩出して、土崩瓦解して仕舞ふ。從って譯者の最も苦心すべき所も自から此點に歸着せねばならぬ。よく篇中の人物の性格を會得し、了解し、翫味して、そしてその性格をば、一言一句の間に發露せねばならぬ。辭句の解釋も勿論必要ぢや。詞藻の美固より發揮すべしぢや。が、それより先きに、篇中の人物が、果して明かに躍動して居るや、否やに心掛けんければならぬ。さもなければ、その飜譯は單に外形を傳へし迄で、要するに死物たるを免れませぬ。本篇の飜譯者は、充分篇中の人物の性格を

發揮したと言ひますか。早速足下の返答を伺ひたい。さァ何うです。

批評家　さァ譯者君、何とか返事をし玉へ。互に辯難攻擊せんければ議論に花が咲かない。僕などは平地に波瀾を作ることでも敢てする。口で言はれぬとあらば筆で書き玉へ。

記者　君が書いたら僕の雜誌に載せてあげる。何れその中……。

芝居狂　さァ〳〵〳〵、返事は何んと？

譯者　一々御尤の御教訓、御好意の程は決して忘れま

せぬ。が、御返事のところは、今五六年ばかりお待ちを願ひまする。

當世才子　何に？五六年？この多忙の世の中に君も迂遠なことを言ふ人だ。せめて五六分に爲玉へ。

譯者　ことによると七八年……。

一同　それでは何れ又出直さう。　と退場

沙翁　ハ、、、、中々面白かった。　と退場

譯者　ヤ今立ち去られた人の横顔は、あれは確かに…………。

と見送る

明治三十九年一月

淺野馮虛

第三版序

初版再版には、譯者の不注意より、幾多の誤謬をふくみたりしが、豐島定君、川村理助君、その他諸兄の綿密なる注意によりて大に之を訂正することを得たり。その好意を忘れざらむが爲めに爰に記して感謝の意を表す。

譯者誌

「ヴェニスの商人」に就きて

(一) 本篇の梗概
(二) 人物の性格
(三) この物語の出所
(四) 刊行の年月
(五) 脱稿の年月

(一) 本篇の梗概

余は劈頭先づ本篇の梗概を説き、讀者をして一篇の脈絡及び篇中に活動する所の主要なる人物に親ましめんとす。元來舞臺の上に演ずべくも

のせられたるが故に、之を机上に繙くに當りては、小説の如く入り易からず、先づ其大體に亘りて相當の準備あるを便とす。殊に篇中の人物に親みたる上ならでは、充分の興味は得難かるべし。初めて本篇を繙かるゝものは、本文に入るに先立ちて、此梗概を一讀せられんことを希望す。一旦讀破せられたるものにても、之に由りてその記臆を新たにせんは、敢て無用の業にもあらざるべし。梗概は少しくラムの沙翁物語を參考せり。

金貸の猶太人シャイロック

爰に以太利國ヴェニス市在住の猶太人にシャイロックと呼べるものあり。金貸を本業とし、市内の商人どもに高利の金子を貸して巨萬の富を作りぬ。元來頑冥無情の老骨にて貸したる金子を取り立つるに些の容赦とてもなければ、多くの良民より蛇蝎視せられ、就中同市の貿易商アントニオの憎む所となりぬ。シャイロックも亦アントニオ

に對して痛烈なる惡感情を抱きけるが、其惡感情の因てきざせる理由の一は、アントニオが窮乏の人民に對し、無利息にて金錢を貸與すること是なりき。兎に角兩者の反目の程度は非常にして、アントニオは市塲の邊にてシャイロックに邂逅する毎に必らずその冷酷なる處置を攻擊し、甚だしきは其面に唾するに至れり。シャイロックは陽には反抗せざれど、内心には不平止み難く、偏に復讐の機會を待ち居れり。

貿易商アントニオ

アントニオは貿易商としては、誠に世間類例なき青年紳士にて、其心飽まで親切、又禮節にあつく、さながら羅馬古武士の風ありシャイロックとは正反對に一般士民より大に尊敬せられ、サラリノ、ソラニオ、グラチアノ、ロレンゾ等の諸人士皆其高風を仰ぎ、その門下に集りぬ。就中アントニオが刎頸の友垣を結べるものをバッサニオといひ、殆ん

ど同胞も啻ならざる觀ありき。バッサニオは名門の出にしてその眉目極めて清秀なる風流才子なるが、若氣のあまり華美の生活を營みければ、その多くもあらぬ財産は何時しか蕩盡し、少なからぬ負債をさへ作りぬ。されどアントニオは常に其窮乏を救ひ、兩者の間は心も一つ、財布も亦一つなるの觀ありけり。

風流才子バッサニオ

或る日の事なりき、バッサニオはアントニオに會合し、爰に借財償還の妙計ありとて、包む所なく胸中の秘密を陳べて言ふやう、ベルモントの地に富裕の一貴女あり、「まだうらわかき身を以て、父と母とに先立たれ、廣き世界に一と本の清き姿の百合の花、色香すぐれしその上に、尙ほすぐれしは其心ばへ、いつぞや小生訪問の折、ちらと賜はりし情思の眼光、あゝその後移香の身にしみ／＼と得忘れぬ。若し今日之を訪問せば、必らずその芳情に預りて婿がねとなることを得、因て鉅萬の財産を我物となし、年來の借財を償還し得べし。たゞ憾むらくは、かゝる貴女の情人として打つて出でん準備の金子に事を缺くが故に、重ね／＼の事なれば甚だ言ひ惡けれど、願くは金子を借用したし」と。

アントニオ金をシャイロックより借用す

折からアントニオの手元に現金とて無かりしが、二ヶ月以内には、莫大の貨物を積みたる所有の船が歸港する筈なれば、何とか工夫もあるべしとて、兩人相前後して、終に高利貸のシャイロックの許に到り、利子は汝の言ふが儘に拂ふべければ、金三千兩を貸せと請求す。之れをきくやシャイロック日頃の怨みむら／＼として堪へ難く、「アゝ若しも彼奴の急所を壓へることが出來たなら、年來積もる怨恨をば、など晴さずにおくべきぞ。畏れ多くも曇りなき我猶太の民衆に惡意

を挿み、場所もあらうに四方の商估の格別繁く雲集ひ來る市場の裡にて、このシャイロックに惡口雜言、拙者が日頃營める肝要の職業をば糞味噌に貶し、汗水垂らして贏けたる貴い金子に、利息の名を附けて嘲弄す、彼奴を容赦しておくやうて、何で猶太人の顏が立つものか」と獨語す。アントニオはシャイロックの返事の遲きをもどかしがり、傍より之に迫る「何うぢや、金錢を貸して呉れるか」「イヤアントニオ樣、」とシャイロックは答へぬ。「拙者が金貸業を營んで居るといふので、貴所樣は、人混みのする市場に於て、何回拙者を罵られたか知れますまい。なァアントニオ樣、貴所は拙者を捕へて何と言はれた。ヤレ人非人の邪教徒、ヤレ宿無の犬畜生と、言語に絕えたる惡口雜言。そして拙者の上衣に唾液を吐かれた。然るに今となつて、何うやら拙者の助力が惜しげの口吻、餘りといへば胴慾ではあるまいか。拙者は之

に對して何と返答せばよからうか」されどアントニオは冷然として答へぬ。「イヤ拙者の仕打には今後とて變りはないぞえ。貴公を捕へて犬とも呼ばう、唾液も懸けやう、蹶飛ばしもせう。されば貴公が三千兩を拙者に貸すにしても、朋達に貸す氣では貸さぬが善い。寧ろ仇敵に金子を貸す所思で居られい。シテ萬一約束に背きもせば、些末の遠慮會釋をするには及ばぬ。直に拙者を刑罰に當てられい」「イヤ、さう言はれては話がなりませぬ」とシャイロックは、外貌に好意の假面をかぶり「實を申せば、行々は貴所樣と和睦をなして、親しくお目をかけて戴き、これまで受けし戮辱を、さらりと水に流したき拙者の本心。今回御用の金子を差上げまするに致しても、利息などは一文も頂戴せぬ決心。さァこれより拙者と共に公證人がり御同道なされませ。そして證書

が出來た上は、保證人の儀には及びませぬ。貴所樣御一人の調印を願ひたうムるところで一ッ戯れに若しじか〳〵の日じか〳〵の場所に於て、證書面に載せたるじか〳〵の金額を返濟されぬに於ては、その科料として、拙者の随意に、貴所樣の身躰の肉正に一斤を頂戴するなどゝ、假に決めて置かうではムらぬか」

飽まで律義なるアントニオは之をきいて大に心を動かされつ、シャイロックが次第に眞人間の域に近づくを喜び、且つは二ヶ月以内に我が所有の貨物の入港すべきを預想し、一も二もなく右の條件にて金子三千兩借用の件を承諾しぬ。バッサニオは心安からず再三之を中止せしめんとせしが、終にアントニオの決心を飜さしむるに至らざりき。かくの如くにして人肉質入れの大訴訟事件は胚胎しぬ。

富家の女主ポルシア

さても曩きにバッサニオが言ひし、ベルモントの一貴女といふは、その名をポルシアと呼び、即ちケートーの娘にて、ブルタスの妻と冊きし賢婦人とは同名異人、其才色に於ても露遜色なき一少女なるが、ポルシアの亡父は、生前三種の手筥を作り、其中の一個にポルシアの肖像を入れ、之を抽き當てたる男子に姫を與へんと遺言せり。筥の上には各々題字あり。黄金の筥に題して曰く、『われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。』銀の筥に題して曰く『われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。』又鉛の筥には、『われを選ばむものは、持てるすべてをさゝげ、すべてを賭せよ』とあり。婿の候補者は、この文句によりて、何れが當り籤なるかを察し、之を選擇せざるべからず。之をきくや、われこそ首尾克其籤に當らんとて、諸國よりベルモントの地を指して集りく

婿選びの抽籤

る公達の數甚だ多く、ネープルスの殿あり、佛蘭西の貴族あり、その他英國の男爵、蘇國の君、日耳曼の若殿、モロッコ公子、アラゴン公子等一々數へ盡すべくもあらざりしが、是等の中にてたゞ一人も、姫の意中の人はなく、姫は振り向きて見んさへも懶く思ひ居りしが、たゞ亡父の遺言もだし難きに由り、抽籤を望むものあれば、其志望に任せて之に加入せしめぬ。抽籤の前には、寺院に赴きて、引きたる籤の何物なるかを口外せぬこと、一旦籤に外るれば、生涯婦人に關係せぬこと等を誓はざるべからず。中にはこの誓詞に畏縮して、抽籤に加入せざるもありしが、モロッコ公子、アラゴン公子等は進みて籤を抽き、モロッコ公子は黄金の手筥を選びて失敗し、アラゴン公子は銀の手筥を選びて之も失敗す。かゝる際に訪問せるが即ちかのバッサニオなりき。バッサニオは借りたる三千兩を以て盛に儀容

を飾り、隨員を揃へ、多辯にして賑やかなる俗才子グラチアノも亦隨員の一人たり。ポルシア一見してバッサニオと相愛し、而してポルシアの侍女ネリサはグラチアノと相愛す。然れども亡父の遺言は自由の結

バッサニオの抽籤

婚を許さゞるを以て、ある日型の如く抽籤を行ふ。バッサニオ三種の手筥の題辭に對して沈吟の後、外觀の決して信頼すべきにあらざるを思ひ、思ひ切つて鉛の手筥を開くに、内部には果してポルシアの肖像あり。佳人才子が歡天喜地の情知るべき也。やがてポルシアは一個の指輪を取りてバッサニオに與へ、何事ありともこの指輪を失ひ玉ふなと言へば、喜

指輪

悅の念に充ちたるバッサニオの何にかは躊躇すべき。生命のあらん限りは決してこの指輪を失はじと固く誓ひぬ。是等の間グラチアノとネリサとは、傍觀してありしが、元來物に臆せず、面皮の一方なら

ず厚きグラチアノの、何とて默してあるべき。ずる〳〵と進み出てゝ、吾にも同時に結婚を許せと迫る。「それは贊成致すが、」と、バッサニオは聊か意外に驚きたゞその前に女房を一人見立てる必要がある。」言はれてグラチアノは、直に侍女ヂリサとの關係を說き、ヂリサも稍々口籠りながら、承諾の旨を答ふれば、バッサニオ夫妻にも固より異議はなく、爰に於て一時に二た組の夫婦の約束は成立し、一座はさながら春風春水一時に至るの趣を呈しぬ。

グラチアノ及びヂリサの結婚

俄然この歡樂は、アントニオよりの使者ソラニオの來着に由りて打破せられぬ。バッサニオはソラニオより一通の書狀を受取りて讀みもて行きしが、見る〳〵其面色は土の如くなりぬ。ボルシアは側より見て其只事にあらざるべきを思ひ、その理由を問ふ。「イヤ、ボルシア」とバッサニオは長太息つきて答ふるやう「卿にまで多大い苦勞をかけて相濟まぬ。實はこの書狀の中には、世にも面白からぬ文字が載せてある。過日余は思ひの丈を初めて卿に開陳せし折、一切の事情を有りのまゝに自白し、身には一錢の財産もなく、裸一貫の紳士だと言ひましたが、今日より見れば甚だしき掛値、實は裸一貫以下と言ふべきでムつた」

アントニオの不幸の消息

これよりバッサニオはアントニオの周旋にて猶太人シャイロックより金子三千兩を借り受けたる事、若し三ヶ月以內に該金額を返濟せざるに於てはアントニオの身體の肉正に一斤を渡すべしと契約せる事、然るに其三ヶ月の期限をあだに過ごして、アントニオは今や、獄裡の人となれる事等、言葉せはしく說明すれば、使者のソラニオ、又故ありてソラニオと途中より同行し來れる、シャイロックの娘ヂェシカ等は、シャイロックが是非ともア

ントニオの肉一斤を截り取らんとして、何人の忠告にも從はざる事情を詳述す。之を聞くや、ポルシア姬の凛乎たる精神は、その纎弱の細軀の內より迸り出て、是非ともわが良人の恩人をば救ひ出さんとの決心と、之に對する善後策とは瞬間にその方寸の裡に湧き出でぬ。姬は屹然としてバッサニオを勵ましつ「三千兩の金額を二倍にして、六千兩拂ふた上に證文をお取揚げなされませ。更にその六千兩を二倍、三倍にしても苦しうはムりませぬ。それ程大事の親友が、バッサニオの爲めに頭髮一筋損はれたと言はれてもなりませぬ。それにつけては、これより直に寺院に赴き、公然に妾をば郎君の妻となされませ。シテ婚禮の儀式さへ濟まば即刻ヴェニスなる、その親友がり訪問れらるゝが善い。身不束ながら心に疚しき所ある良人に新枕はかはさせませぬ」――かくて、この二組の新夫婦は、これより直に婚禮の式を擧げしが、式の濟むや、バッサニオはグラチアノを伴ひ、晝夜兼行してヴェニスに赴きぬ。されどバッサニオのヴェニス行は殆んど無効なりき。何となればシャイロックはその提出せる金子には振り向きもせず、偏に契約の如くアントニオの肉一斤を取らんことを主張したれば也。

ロレンゾとヂェシカの驅落

さてもシャイロックとアントニオとの間の惡感情は、一朝一夕の事にあらずして、由て來る所遠き由は既に述べたるが、シャイロックが今回殘忍にも、アントニオの肉を割取せんとするに至れる近因あり。そは其獨り娘のヂェシカの驅落事件なりき。ヂェシカは氣の輕き美人にして、其下男の道化者ランセロットの口吻をかりて言へば「異敎徒ながらも稀れなる美人、猶太人とはいへど上品の素質」なりき。兼ねて耶蘇敎徒にして、アントニオの友なるロレンゾと相愛し居たるが、ベルモントに出

發の前夜催したるバッサニオの宴席に、父シャイロックが招待せられし不在を利用し、金銀財寶を夥多身につけて情人と驅落をなしぬ。たゞ一人の娘を日頃敵視せる耶蘇教徒に奪はれたるシャイロックの煩悶と失望とは知るべきのみ。されど一層その憤怒の種となりしは、その高價の珠玉と、多額の金銀を持ち逃げせられし一事にして、渠は殆んど發狂せんばかりに呼號亂舞しぬ。さなきだに陰險なるシャイロックは今や全く山狗の如くなりぬ。手に觸るゝものは何物なるを問はずして之に噛みつかんとすがゝる際にアントニオが期限を誤りたることなれば、猛然として其肉を截り取らんとは決心せる也。シャイロックがかく夜叉の如くに荒れまはりつゝありしに反し、ロレンゾ、ヂェシカの兩人は、飛ぶ鳥の如くに極めて呑氣(のんき)なりき。手に手を取りて道行と洒落(しゃれ)のめし、おのれ達二人の外には、世界に何物あ

るを知らず、彼地(あち)此地(こち)と遍歷しけるが、途中バッサニオの許に向はんとする使者ソラニオに邂逅し、終に之に伴はれてベルモントなるポルシア邸に赴きつ。固より何所(いづこ)に行かねばならぬといふ用事ある身にもあらねば、そのまゝポルシア邸に客分の身となりて、不相變樂しき戀の夢に耽り居たりき。その間にヴェニスにては、人肉質入裁判の世にも畏ろしき當日が到着せり。

人肉質入裁判

開廷の時刻迫るや、ヴェニス公爵は諸貴族を從ひて臨席しつ。原告シャイロック、被告アントニオを初め、バッサニオ、グラチアノ等又皆來りて席に連なれり。さて今日の判事として、最初公爵より指定されしは、ベラリオ博士と呼べる老法律大家なりしが、疾病の故を以て、一人の代理の判事を送り越しぬ。やがて其判事の入り來るを見れば、思ひの外に

乳臭の氣ある美少年にして、同じく年少の一書記生を隨ひぬ。この年少判事こそ男裝せるポルシア姫にして、その書記生は即ちかの腰元ネリサなり。いかにしてポルシアがかく判事として來れるか、又法廷に於ていかなる判決を下したるか、又いかにしてシャイロックの毒計を破り、九死の中よりアントニオを救ひ出せるか、又この際に於けるシャイロックの得意と絕望との言動は如何、高潔なるアントニオの態度は如何、饒舌なるグラチアノの摸樣は如何。——是等は沙翁が空前絕後の大手腕を殘る限なく發揮したる所にして、單に机上に讀む丈にても讀者は神飛び魂馳せて滿身の血汐の湧躍するを禁ずる能はざるものあるべし。こは到底梗概にて盡すべくもあらず、又强ひて說かば却つて感興を殺ぎ、天機をもらすの虞あらむ。讀者は第四幕第一場を繙きて徐ろに之を翫味すべき也。

結末

兎に角この裁判に由り、シャイロックの奸計は見事に根底より打破せられて、アントニオは晴天白日の身となり、又シャイロックはその惡計が却つて我身の仇となり、その莫大の財產をロレンゾ夫妻に讓與すべしとの契約をなさしめられ、萬事皆圓滿に落着しぬ。この劇の絕頂は既に過ぎぬ。されど作者の老熟の筆は、先きの結納の指輪を雇ひ來りて、之を材料に、興味津々たる最後の一波瀾を描き出でぬ。第五幕は第四幕の急忙熱烈なるとは正反對に、月を描き、音樂を配して飽までも靜穩和諧、アントニオを初め、ポルシア夫妻、ネリサ夫妻、ヂェシカ夫妻等をして、ベルモントなるポルシア邸前に會合せしめ、一問一答の間詩趣橫溢、和氣靄々人の心に圓滿純良なる印象を與へつゝ、悠々として筆を收むる所、眞に喜劇の大團圓として一點の間然する所なし。讀者は既にこの篇の大綱に通じ、又

篇中の人物に親みたるべければ、余は爰に梗概の筆を擱き、これより人物の性格につき一言せんとす。

（二）　人物の性格

「ヴエニス商人」中最も活躍飛動する二人物あり。一はポルシアにして他はシヤイロック是也。此二人物は多種多様なる此一篇の物語の中に巧みに組み合はされ、美と醜と、白と黒と、善と惡と相對映して、遺憾なくその特色を發揮せり。

ポルシアは凡てが最も圓滿に具足せる婦人にして、八面玲瓏、その（ポルシア）弱點と見るべきものなし。チエームソン夫人その著沙翁（シエークスピーアス）の女性（ヒロインス）」中に詳說して殘す所なし。ポルシアは、沙翁が他の女性の多くに附與したる美質を悉く具備し、品位、愛嬌、愛情等皆備はれり。されどポルシアは是等の外に、別にポルシア特有の美質を具へたり。即ちその卓越せる能力、その熱誠なる氣象、その堅固なる決斷力、その躍如たる精神等是也。是等はポルシアに在りては先天的性質也。尙ほその境遇より作られたる幾多外面的特質あり。彼女は高貴の地位に生れ、多大の財産を有し、無數の婢僕を使役し、贅澤三昧に日を送れり。故に威儀自から備はり、その爲す所、言ふ所皆勿躰あり品位あり。日頃缺乏の何物なるかを知らず、悲哀失望の如何を味はざるが故に、その智慮には憂鬱の蔭なく、その愛情は常に希望、信仰、歡樂と相提携し、而してその機才には、毫も辛辣の趣なし」と說ける何人も首肯する所なるべし。

ポルシアの美質は到る所に發露す。されど最も充分にその特色のあら

はれたるは第四幕法廷の場也。その赫々たる才力、その高尚優雅なる思想、その公平なる判斷その春雨の如き慈悲博愛の情思等、例へば闇にかゞやく星辰のおもむきあり。げにポルシアの如き婦女は、現實の世界に於ても、又空想の世界に於ても確かに無類也。バッサニオの配としては甚だ勿躰なき觀あり。

ポルシアを光明の寵兒とすれば、シャイロックは暗黒の子孫也。彼(シャイロック)は篇中の惡まれものにして、又充分惡まれる丈の價値を有す。友愛の假面の下にアントニオの生命を奪はんとし、その一人娘に對して、やさしき言葉一つだにかけず、娘よりは却て金錢を重視し、又樂しかるべき家庭を地獄の如く不愉快に住みなし、下男にまでも愛憎をつかさるゝ等、到底渠は眞人間にはあらざる也。されどシャイロックとても生れながらの

惡黨にはあらず。一半はその境遇が、渠が如き冷酷無道の人物を作りあげたる也、渠は猶太人也。西洋の猶太人は我邦の穢多よりも憐れむべし。殊に中世時代に於て然りき。彼等はさながら蛇蝎の如く排斥せられぬ。何人か人間の仲間外れとせられて怨恨の念を抱かざらんや。況んやアントニオがシャイロックに對する處置は、とりわけ亂暴にして常規を脱せるをや。吾人はシャイロックの罪を憎めど、その自信力と、その一種の勇氣とに對しては同情を惜む能はざる也。ヘールス博士曰く「シャイロックは、數世紀に亘れる壓制と戮辱とによりて毒氣を吹き込まれたる猶太人の氣象を繼續し、更にその身に襲來せる幾多の苦き經驗は、この毒氣をして一層增大せしめぬ。鐵鎖は肉を腐蝕せしめ戮辱は心を腐蝕せしむ。沙翁はこのシャイロックなる人物が眞に惡むべく厭ふべきを感じたると同時に、如何なる徑路を

辿りてかれがかゝる惡人となりしかを攻究するを忘れざりき。かくてその惡を描くと同時に、又その非凡の腦力と氣力とを描けり」と。蓋しこの人物を窺ふに最も穩當の見解なるべし。

　シャイロックの不人望とは正反對に、何人にも人望を有するはアントオニ是也。其親友バッサニオが心を傾けて兄事するは言はずもあれ、ソラニオ、ロレンゾ等皆口を極めて之を稱揚し、かの多辯なるグラチアノといへども、アントニオに對してのみは、日頃の亂暴なる態度を一變し、親切と忠實とを旨とするの風あり。地位高きヴェニス公爵もこの人の爲めには辯護の勞を取り、心なき獄丁もこの人の爲めには特別の恩典を辭せざりき。渠は實に各階級の人士より畏敬尊信の中心たり。こは又無理ならぬ次第なり。何となれば渠はシャイロックを除けば他の何人に對して

も徹頭徹尾懇切を旨とし、人の爲めに最大の考慮と周旋とを辭せざれば也。而してかの畏るべき裁判の當日、自若として死を待ち、些の怨言をも吐かざるが如き、確かにその氣品の高潔にして、凡庸の商人にあらざるを思はしむ。たゞシャイロックに對しては、今少し其處置の寛容ならんを望ましむるものあるも、こはこの偏狹なる時世の罪なることを忘るべからず。當時の歐洲の人士が、異教徒に對する憎惡の念慮は、一般に今日の人士の想像の外に在り。又當時は金貸なる職業を最も擯斥したる時代なりし也。

　アントニオに在りて缺點と見るべきは、其受動的なる事是也。渠は陰氣也、遠慮勝ち也。バッサニオをして自己の危殆なる內情を知らしめざらんとして、終に救助すべき機會の過ぐるまで沈默を守れるが如き、遠慮もその程度を通り越せり。渠若し肉を割取されて死亡することもあらば、後に至

りて之を知る親友の苦惱悔恨はいかにぞや。されどかゝる人物が中心となりてこそ「ヴェニスの商人」の一篇は成立せるなれ。渠の如き友愛の念あつき人が居りて、肉を抵當に人の爲めに金子を借り、又渠の如き引ッ込み思案の人物ありて、期限の盡くるまで口外せざりしにあらずんば、この物語は根底より瓦解し去る也。即ちこの物語の起れる源因は一にアントニオの一身にかゝれり。これアントニオが本篇の主人公にあらざるにも係らず、尙ほ「ヴェニスの商人」なる標題を冠する所以なるべし。猶ほ「シーザー」の篇に於て、その實際の主人公がシーザーにあらねど、その悲劇の起るべき根本がシーザーに在るを以て、シーザーを以て標題となせるに似たらんか。

バッサニオ

バッサニオは最初に在りては單に顏の造作の奇麗なる色男とし か思はれず。大負債を作りて毎々アントニオの懷を痛め乍ら尙ほもアントニオより借金せんとして婉曲の文句を聯ね、而して借財償還の妙計は富家の一女子と結婚するに在りと臆面もなく公言す。やゝ興がさめざるを得ず。たゞ何所となく氣品の高きが取得なるべし。されどベルモントなるポルシア邸に赴きてよりは、天女の如きポルシアの光に浴したる結果にや、その言動專ら高尙優雅となりて、口に眞の愛情を語り、讀者をして渠が最初の目的の頗る下劣なりしを忘れしめ、バッサニオ自身といへども、後には全く之を忘却し去りたるの趣あり。若し渠にして惡友にくみし、陋劣の魔女に交はりたらば、果ては手のつけられぬ道樂者ともなりけむ。この事なかりしは、渠も亦世界第一の果報者といふべし。

グラチアノ

グラチアノは世間にあり觸れたる俗才子也。何人も之に對して尊敬の念を拂ふ能はねど、さりとて何人もその存在を重寶とせ

ぬはなし。かゝる人物の浮世に持てる役目は、愉快に賑やかに、時には少しく出過(です)ぎる位にして、他人の興を助くるに在り。かゝる人物が居て呉れねば、いかなる集會の席も寂寥を感ぜざる能はざるべし。グラチアノは此種の人物中の傑物也。その毒にならぬ饒舌は、いかなる場合にも泉と湧きて盡くることなし。腰元ネリッサの御亭主としては誠に似合つた男なるべし。グラチアノ、ネリッサなくも此一篇は勿論成立すざれどかくては、一篇の寂びしきこといかにぞや。

ヂェシカとロレンゾ

ポルシア夫妻の眞面目なる愛情に對しては、ヂェシカ、ロレンゾの小說的戀物語あり。二人は篇中主要の人物にあらねば、その性格の描寫は他に比して頗る簡略なるを免れねど、さりとて片言隻語の間に、その面目を伺ひ得ざるにあらず。ヂェシカにつきて吾人が催す觀念の

重もなるものは、その美人なること、その性格の頗る剽輕(ひやうきん)にして物に頓着せざるの風あること是也。ヂェシカは責任とか、義務とかいふ觀念の極めて薄き少女にして、父の家を逃亡するにありても、平然として「さて、これから手筈の上に齟齬(くるひ)がなくば、今が親子(おやこ)の生別(いきわかれ)娘は父、父は娘を失ふ譯(わけ)」などゝ氣樂なことを言ふ。彼女は父シャイロックとは殆んど正反對の性質なれど、さりとて一種の猶太人的特質がなきにあらず。その驅落に當り、空恍(そらとぼ)けて父を欺けるが如き是也。彼女の頭は又一種東洋的空想に充ち、月に對し、音樂に對して、詩思に耽るを見る。この點が詩的なるロレンゾと意氣投合せる源因なるべし。ロレンゾはヂェシカに比すれば、やゝ深みのある若者也。詩思空想飽まで強く、世事には頗るうとき人物なるに似たり。猶太人の少女を理想化して愛し、持ち逃げしたる金銀財寶を濫費して省みざるが如き、

以てその人となりを見るべし。

道化者のランセロット（ランセロット）は一種下等なるグラチアノ也。坐興を助けん爲めの人間としては、無用なるにもあらねど、勿論碌な事の出來るにあらず。その長所は下らぬ駄洒落と、無用の贅辯と、頓珍漢の學者語を濫用して、人の玩弄物となるに在り。ロレンゾの素破拔くところに由れば、黒ン坊の女を孕ませたる由、渠に在りては大出來のつもりなるべし。されど讀者はこの男のお蔭にてシャイロックの家庭の内部を知ることを得、又ロレンゾ、ヂェシカはこの男を媒介として驅落を就げたり。渠も決して「大食して、朝寢坊をするだけが能の素餐者」にはあらざりき。

（三）この物語の出所

沙翁は、他人の使用したる趣向若くは材料を使用することにつき常に無頓着にして、有り觸れたる物語を自由自在に驅使し、わが藥籠中のものとせり。「ヴェニスの商人」も固よりその例にもれざりき。この篇の主要なる事件は二個の物語より搆成せらる。即ち人肉質入の物語と手筥抽籤の物語是也。共にその出所の甚だ舊るき物語にして、沙翁以前に既に舞臺にかけられたる事さへありしに似たり。

人肉質入の物語　人肉質入の物語の直接の原本は以太利に在り。ギオヴァンニ・フィオレンチノのものせる「イルペコローン」と題せる物語集是也。こは一三七八年の編纂にかゝりしが、一五五八年に至りて初めて出版せられたり。かくて英國に入り、英語に飜譯せられしものゝ如きも、其譯本は今日に傳はらず。兎に角此作と「ヴェニスの商人」の間には明かに類似の點

を有す。此物語に於ても重もなる舞臺は仝じくヴェニスに在り。商人アンサルド（アントニオに相當す）はこの市の住人也。猶太人の金貸より金子借用の條件、及びその目的等大躰に於て兩者同一也。而してボルシアに相當する一貴女がベルモントに住めるの一事は、就中動かし難き類似の點なり。やがて此貴女が判事としてアンサルドを救助する事、又裁判が濟みたる後、良人の指輪を請求する事等も相似たり。最後にその侍女がアンサルドに嫁するは稍々異なれど、侍女の結婚といふ丈は同一なり。

手筥選擇の物語

中世に行はれたる羅典語の物語集に「ゲスタ・ロマノルム」と稱する有名の書あり。東西兩洋の傳説、奇譚、神話等を輯聚せるもの也。ロビンソンと稱する人に由りて英譯せられたるが、最もエリザ朝に流行せり。沙翁が手筥選擇の物語の出所は即ちこの書也。之に由れば、羅馬の一王、我王子の妃となすべき婦人の性質を試みんとして、三種の手筥を選ばしめたりとあり。同じく金、銀、鉛の三種にして、金の手筥には「われを選ばむものは、其人にふさはしき程を獲む。」銀の手筥には「われを選ばむものは、その性情の欲するものを獲む。」鉛の手筥には「われを選ばむものは神が其人に附與せる所を獲む」とあり。この題句の殆んど「ヴェニスの商人」と同一なるが、原本として爭ひ難き點なるべし。

以上二個の物語が「ヴェニスの商人」の最も有力なる原本也。されど「ヴェニスの商人」の發刊以前に、此兩種の物語を合併したる脚本が、既に世に存在したるものゝ如し。こはスチーブン・ゴッソンなる人が、一五七九年に書き殘せる脚本攻擊論中にあらはれたる數句を根據として下したる推定にして、固より明確なる事實にはあらず。又古るきバラド躰に、甚だしく「ヴェニスの

商人」に似たる作あり。兩者の間に關係あるは疑ふべくもあらねど、このバラドの年代の全く不明なるが爲めに、何れを出所とすべきかにつきては確説なし。たゞ此バラドを以て「ヴェニスの商人」以前に出でたりとなす説がやゝ有力なるもの〻如し。

他にも局部の出所として擧げられたる作はあれど爰には略す。たゞマァローの「モルタの猶太人」(一五九〇年出版)に就きては一言せざるべからず。マァローが脚本作者として沙翁の先輩なるは人の知る所にして、沙翁をのぞけば、當時第一の大作者也。その描ける猶太人バラバスは、怪物に近くして、シャイロックとは同一視し難きも、兎に角その强慾にして、排耶蘇敎的なるは兩者相似たり。又バラバスの娘が耶蘇敎徒を愛する事も大にロレンゾ、ヂェシカの關係に似たり。沙翁が多少之に負ふ所ありしは疑ふべからざる也。

されど是等の出所といふべき數々の物語を見れば見るほど、今更顯著なるは沙翁の非凡なる天才是也。「ヴェニスの商人」の材料は最も陳腐也。たゞこの陳腐なる材料を活用せる沙翁の力量は實に古今獨歩也。諸種の離れ〳〵の物語を集めて、之を大成し、融合し、各自の間に切つても切れぬ一大脈絡を作らしめ、而してシャイロック、ポルシアを始め、幾多生氣躍々たる人物を配置し、詩味あり、變化あり、興趣あり、世にも愉快なる別乾坤を舞臺の上に描き出せり。是等は獨り沙翁の作に求むべくして、所謂出所と稱する所の物語中には求むべからざる也。

(四) 刊行の年月

「ヴェニスの商人」は一五九八年七月二十二日初めて書籍組合の帳簿に登録せられたるが、その下の但書に、チャムブレン卿の許可なくんば出版を禁ずる旨を附記してあり。チャムブレン卿とは、沙翁が加はれる一座の俳優の保護者也。この但書の爲めにや、本書の出版はやゝ遲延せしも、一六〇〇年に至りて二種のクォート版世に出でたり。一方はロベルツなるものゝ印刷にかゝり、通常第一クォート版として最も重視せらるゝもの也。

第一クォート版

他はヘースなるものゝ印刷にかゝり、之を第二クォート版といふ。一六三七年には第三クォート版あらはれ、一六五二年に至り、更に第四版あらはれぬ。以てこの脚本の大に世に行はれしを知るべし。

その他の諸版

されど是等の刊本は、單に第二クォート版の再刊に過ぎずして、刊本としての價値は少なし。第一フォリヲ版は一六二三年に出でしが、これ又

第二クォート版と大同小異にして、單に些末の點に於て異なるのみ。之を要するに「ヴェニスの商人」の本文には大なる困難なし。その根底はロベルツの第一クォート版にして、之に第二クォート版、及び第一フォリオ版を參考せる也。

（五） 脱稿の年月

脱稿の年月に就きては議論まち／＼也。本書が、一五九八年七月書籍組合の登録簿に記入せられ、又同年あ行の某書中にも載錄されたれば、遲くも一五九八年七月以前に脱稿せる丈は明白也。然れども明白なる點はたゞこれのみ。或る一派の人士は、此書の脱稿を一五九四年とす。これヘンスローなる芝居管理人の日記に、一五九四年八月二十五日の日附にて、「ヴェニスの喜劇」なる一作を擧げたるに基く。謂らくこの「ヴェニスの喜劇」こそ即ち

一五九四年說

「ヴェニスの商人」なれど。然れども、その證據は餘りに茫漠たるが上に、作風より見るも少しく早きに失するが如し。多數の沙翁學者は、脫稿の年月を一五九六年と推定す。この說蓋し最も穩當なるが如し。

一五九六年說及びその理由

その理由に曰く(一)第四幕法廷の初部に見えたるシャイロックの言辭中には、シルヴェーンの「オラトル」英譯中に類似の個所多し。この英譯は一五九六年の出版にかゝれり。(二)「ヴェニスの商人」の最後の幕の首部は、明かに「ウィリー、ビガイルド」と題せる戲曲に學ぶ所あり。この作の出版は明白ならねど、九六年より九七年にかけて出版せられしものゝ如し。(三)シャイロックの如く、法廷にてナイフを磨く事は羅典劇「マキアヴェラス」中に在り。この劇は一五九七年劍橋大學にて演ぜられたる事あり。

是等の證據は皆不確實の痕をとどめ、最後の斷案を下すには足らねど、何れも九六年より九七年の邊を指すは同一也。尙ほ作の大躰の性質より推測するも、九六年頃といふが穩當なるに似たり。ダウデン氏曰く、「一五九六年は吾人が指定し得る年代中の最も穩當なるもの也。」その他の諸家にありても此說を採るもの最も多し。

他に一說を立つるものあり曰く「ヴェニスの商人」は先づ一五九四年頃に草せられ、その後改作せられしならんと。されど圓滿にして斧鑿の痕をとゞめざる此作品より推せば、こもさまで有力なる說とは言ひ難かるべし。

明治三十九年一月

譯者識

喜劇　ヴェニスの商人

登場人物

ヴェニス公
モロッコ公子 }
アラゴン公子 } ポルシア の求婚者
アントニオ　ヴェニスの貿易商
バッサニオ　前者の友にてポルシアの求婚者
ソラニオ }
サラリノ }
グラチアノ } アントニオ及びバッサニオの友
ロレンゾ　ヂェシカの情人
シャイロック　金持の猶太人
チュバル　猶太人、前者の友
ランセロット・ゴボ　道化者、シャイロックの下男

老ゴボ　ランセロットの父
レオナルド　バッサニオの家來
バルサザール }
ステファノ } ポルシアの家來
ポルシア　富家の女主
ネリサ　前者の侍女
ヂェシカ　シャイロックの娘

其他ヴェニスの諸貴族、法廷の役人、獄丁、
ポルシアの從者、及諸種の從者等

場所

ヴェニス及びポルシア邸の所在地ベルモント

第一幕

第一場　ヴェニス市　街頭

アントニオ(ヴェニスの貿易商)サラリノ(アントニオの友)ソラニオ(全上)登場

アントニオ　この日頃結ぼれがちのわが心、その理由は己も知らぬ。これには己も呆れはて、又卿達も呆れるとやさるにても怪しきはこの氣欝症、いかなれば之に感染り、いかにして之を身に受け、又いかなる料から之が造られ、いかなる物から之が生れしか、それ等のこと一として、肝腎の己にも知れはせぬ。ホンにうとましきはわが身の昨今、積もる憂愁に心がくもり、吾とわが身の判別がつかぬ。

サラリノ　ハテ貴所のお精神は八重の汐路の浪のまに〱揉まれて居るの

ぢや。海の上は貴所の船舶が數をつくして往來する場所ぢやもの。イヤ見あげるやうな貴所の親船が仰山な帆を張つて、大海原の御大名、但しは金滿家の長者らしく搆へ、又波に浮べる山車もかくやと思はるゝ姿して、他の小形の船舶を眼下に瞰下す威勢は又格別、他の船どもは、畏れ入つて叩頭をしたり、腰をかゞめたり、尻に帆かけて、そここに逃げて行きますぞえ。

ソラニオ

　げに拙者などが、若しも貴所のやうに鉅萬の財寶を賭けて、貿易を營むのであつたなら、氣も魂も身に添はず、海上の船貨にばかり、ひたすら心を奪はれて居る筈。シテ旦暮草の葉を引き拔いて、その葉にあたる風の方向を考へ、又地圖と首引して、港灣の所在をさがし、波止場や船の繋留場を尋ね、早い話が、船貨に取りて、よもやの危險がありさうな、事々物々に胸を惱まされ、是非ともこりや氣欝症に罹らずには居られぬ筈。

サラリ

　拙者とても御全樣、皿に盛りたる羹を、ふッと一と息吹くにつけても、海上の風伯の慘害を想ひ出せば、瞬間にぞッとして瘧を惱らふに相違ない。砂時計の運動を見ても、この砂より淺瀨遠洲の類を想ひやり、財寶を山と積める所有の船が、砂の裡に擱坐して、檣樓の邊が船底の下位に沈み、四邊の土砂を嘗めて居る狀况を想ひやり、取越苦勞をするは受合。それから又寺院に詣てゝ、石疊みの拜殿を見る――それが又心痛の種、石から直に想ひ起すは、險呑な、あの暗礁、若し船がいさゝかも、之に觸るゝが最後、積める香料は、はらり〳〵と波間に四散、勿軆なくも、逆まく怒濤を綾の錦におし包み、今までしか〳〵の價格の

品物が、次ぎの瞬間には消えてあとなき水の泡――かゝる事どもを逐一想ひやれる身が、何として、かゝる災難の、若しも起つた曉の、不愉快を想ひやらずに居るものぞ。イヤ兎角の理由は聞くには及ばぬ。受合つてアントニオ氏は船の積荷の事に氣を揉んで、それで氣分が塞いで居るのぢや。

アント　イヤ左樣の儀が何であるものぞ。一切の荷物を一隻の船に積んである譯ではなく、又所有の船舶の全躰を、仝一地方に向けもせぬ。又拙者の財産の全部が今年一年の運の向き方一ッにて、左右さるゝ程でもムらぬ。されば船の積荷の爲めに氣分が塞ぐ筈は、些末もないので。

サラリ　スリャ貴所は戀愛病をしてムるな。

アント　何ンの、埒もない！

サラリ　戀の爲めでもないと仰せらるゝか。それなら何とも致方がありませぬナ。愉快でないゆゑそれで不愉快――とでも言ふておくか。この理窟から割り出せば、不愉快でない折は、飛んで、跳ねて、笑つて、あゝ愉快ぢやと、怒號くのも六ヶ敷ことはなき筈。それは兎に角、世の中には古來さま〴〵の人間の變物が居りまするナ。或者は年が年中薄目の命、飴屋の笛をきいてさへ、笑ひ興ずる有樣はさながら鸚鵡。或者は又苦い澁い佛頂面して、苦蟲黨の旗頭ネストルさへ噴飯さうな滑稽にも、莞爾ともせぬのがある。（ネストルは希臘の賢王の名）

バッサニオ（アントニオの親友にてポルシア姫の情人）ロレンゾ（前者の友にてヂェシカの情人）及びグラチアノ（前者の友にて多辯家）登場

ソラニ　ホウそれに見えたは御親戚のバッサニオ樣、それにグラチアノと

ロレンゾとの隨行——イヤ拙者はこれにてお暇と致さう。話相手として、拙者などゝは段違の、一騎當千の面々に、貴所の身をば、お委任申す。

サラリ　實は拙者も是非貴殿の笑顏を拜むまで、踏とゞまる覺悟ぢやッたが、かく立派な歷々が、心配して居らるゝ上は、最うそれにも及ぶまい。

アントニオ　イヤ拙者が日頃大事に思ふて居る御兩所——察する所、何ぞ用事が出來して、卿達は、これをよき機會に逃げるのぢやナ。

サラリ　これは方々、お早うムりまする。(これはバッサニオ一行に言ふ)

バッサニオ　おゝ御兩所、その中陽氣に遊びたいものぢやが、さて何時に致さうな。近來はえらい御無沙汰勝ちにて甚だ不本意、一ッ舊交を溫めやうではムらぬか。

サラリ　何れその中、われ〳〵兩人の閑暇な時を繰合はせて、ゆッくりお相手を致しませう。

とサラリ、ソラニ兩人退場

ロレンゾ　バッサニオ樣、かくアントニオ氏の所在が知れたる上は拙者ども兩人も、これにてお暇と致しまする。最も晝餐時にもならば、兼ねて約束の會食の儀をお忘れあるな。

バッサニオ　その儀は承知致した。

グラチアノ　時にアントニオ氏には、甚だしくお顏の色が惡るいと見受けるは僻見か。兎角浮世は茶にすべきもの、それを貴所はあまり大事に取りすぎるゆゑ身躰を害ふ。一躰物に大事を取り過ぎるは、却つて失策の基、ボンに貴殿の憔悴方といふものは、そりや餘りにきびしい。

アント　イヤ拙者はさして此浮世を大事には思はぬ。浮世と申すものは詰まり大仕掛に組み立てられし芝居の舞臺、何れの人も皆各自の役割を演て居る所、さし當り拙者は、愁歎の役を勤めて居るので。

グラ　拙者などは打つてかはつて道化役が所望ぢや。齢も取れ、皺も寄れ、心は飽まで若返へり、笑ひ興じ、跳ね返り、苦しげな呻吟の聲を立てゝ、血の氣が失せて居らんよりは、旦から晩まで酒浸り、ポカ／＼に體内を温めて居るが、何のやうに面白からう。血氣滿々たる六尺の男子のくせに、石膏製の老父の如き顔をするものゝ氣が知れぬ。身躰ばかり起きて居て、顔は何所までも寝惚け、しきりに癇癪玉を破裂させて、黄疸などゝいふ、氣のきかぬ疾病にかゝるは、世にも愚かなる痴人の仕業でムる。就きては一ツ拙者から、アントニオ氏に言ふてきかせる話

柄がムる。これと申すも貴殿がいとしいからの事、いとしいばかりに、饒舌も致すわけ――つら／＼世の中を見渡せば、さても奇態な人もあるもの、その顔は事の外不景氣千萬、よどめる池の水同樣、粕や粘皮にその表面を張りつめられ、一片の生氣といふものもなく、わざと薄默つて氣取込んで御座らせられる。その肚裏を探つて見れば、ハテサテ笑止、深き智畧のある人と、世の愚物どもに囃し立てられたさの、さもしい魂膽「拙者こそはお悧巧者、わが物言ふ間は、狗も吼ゆること相成らぬ」と、ほざき兼ねぬ脊族。拙者が存じて居る人物の中にも、たゞ默つて居るばかりに、智者よ賢者よと持て囃されて居るのが見えるが、若しも一と言居を動かすが最後、聽いて居るものは、直に其眞相を看破りて、惡るいとは知りつゝも、痴者奴ッと、罰當りの惡まれ口の、一ツ

もきゝたうなる。この件につきては、今後尚ほ機會を見て説法致すでムらうが、兎に角イヤに生眞面目な顏を餌に、雜魚にも劣る愚物どもの賞讃を釣らうなどゝは、聊爾にも思召すな。さァロレンヅ御座れ。皆々樣これにて失禮、この説法の結末をつけるのは、何れ食後のお娯樂。

ロレンソ　さらば皆さま晝餐の折に又お目に懸りまする――イヤ併し、グラチアノ大將の饒舌には降參々々。拙者はたしかに、今言ひし、薄默つた、似非賢人の一人に成り果せたに相違ない。口を開く機會がいさゝかも無いのぢやもの。

グラ　尚ほ二年ばかりも拙者のお隨員をして居たなら、卿の耳は、受合つて自分の音聲を聞き取れぬことであらう。

アントン　さらば御兩所、これにて失禮――何れその中グラチアノの忠告を納れて、饒舌家の仲間入りをして見やうか。

グラ　そは難有し、辱なし、默つて居て善いものは、乾し燥ばした牛の舌に賣口惡るき女子衆。

とグラ、ロレンソ兩人退場。

アントン　何んぢや、あの男の言草は。あれでも洒落のつもりかいな。

バッサ　イヤ、グラチアノの文句は、毎々口から出任せの囈語ばかり。これにかけては、ヴエニス市内に敵手はムらぬ。先づ滿足な言葉は、二斗の稃に二粒の小麥が混れる割合、終日それを捜したとて、容易にそれが捜し當ることではない。よし又捜し當てたとて、其骨折を償ふほどのものではムらぬ。

アントン　イヤ時に卿が日頃執心と聞ける、例の姬御前の名は何といはるゝ

な卿がこの天女の祠に、人知れず參籠の祈願を立てし趣は、兼ね〲聞き及んて居るが、今日は、その御本體を白狀すべき、約束の日てあるぞえ。

バッサ　イヤ、アントニオさま、小生こそは親讓りの財產を、殘り少なに費ひすてたる痩侍、尾羽打ち枯して懷裡さびしく暮して居るは、卿がよく知らるゝ通りでおりやる。これといふも、詰まりは、己の身代に相應しからぬ贅澤を盡した爲めの應報、誰を怨まんやうもムりませぬ。因て今後は生活の程度を引き縮めん覺悟、いかにせば濫費の爲めに作れる大穴を奇麗さッぱりと塞げるかと、そればかりに頭を痛めて居る次第。して卿には年來金子と親切との、厚いお世話に預つて居るが、今回も、この親切に甘えて、小生が胸の奥なる借財償還の計略をば、逐一白狀せん所思。

アントオ　おゝバッサニオ、後生であるぞ、早う聽かせてたもれ。若しその計略と申すのが、卿の平生に負かずして、正しき道に協へる事なら、拙者に於いて金子も惜まぬ、骨折も厭はぬ。微力の及ばむ限りの事は、何なりと存分に御役に立てゝ見せる。

バッサ　さう出られては今更に何に面目も總角や、われ〲未だ齡稚く、弓矢の遊戯に耽りし頃、射失ひたる一と本の、矢を搜し出てん手段としては、それと全じ射程の矢を取り番ひ、全じ方向に切つて放し、よく其行方を注視して置いたもの。かくて二本の矢を賭けし爲めに首尾克二筋とも見出した例は、一度二度の事てはない。小生が今かく、往時の乳臭き例證を引き出したるを笑はるゝな。これより述ぶる事柄も、い

づれ劣らぬ、たはけ事。思へばこれまで小生が、卿の手より借りし金子は、積り積つて頗る巨額、して思慮尚ほ足らぬ若者の常、借りたる金子は悉く費ひ果てゝ、殘るはたゞ空財布。なれども卿が之に懲り玉はで、全じ方向に、今一と本の矢を射ることを、お聽許になるならば、今回こそ矢の飛び行ける方向を、注視しておくゆゑに、あはよくば二ヶ筋とも見出す。運拙くとも後に射たる矢のみは、携へかへり、たゞ最初の矢のみに對して、今まで通りの恩借者……。

アント　コレ〳〵卿と小生とは、日頃別懇の間柄、そのやうな迂遠い謎などを何故かける。小生が卿ゆゑに力限り盡さんは、今更問ふまでもなき儀、それを兎や角疑はるゝは、いかにも水臭いと申すもの、わが財産の全部を浪費はるゝよりも不足に思ふぞ。それよりは卿の推量にて、小生の力量に及びさうに思はるゝ事を、遠慮なう、爲いと仰せられい。拙者は何時にても苦しうない。さア早う言ふてくれよ。

バッサ　さらば申し上げまするが、目指すところはベルモントなる富裕の一貴女。まだうらわかき身を以て、父と母とに先立たれ、廣い浮世に一と本の、淸き姿の百合の花。色香すぐれしその上に、尚ほすぐれしはその心ばへ。いつぞや小生訪問の折、ちらと賜はりし情思の眼光、あゝその後移香の身にしみ〳〵と得忘れぬ。姫の御名はポルシアとて、往古羅馬の名士ケートーの娘にて、ブルタスの妻と冊かれし、かの賢婦とは同名異人、その才色にかけても、つゆ優劣はなき少女。さればその令名は早くも四海に傳はりて、津々浦々の果よりも、風がもたらす貴公子の數は十人又百人、姫の額にふりかゝる黃金の髮は、そのむかし、コ

ルチヨスの磯にかゝりし金羊の毛皮かと、勇士ヂェーソンの昔噺も忍ばれまする。（ヂェーソンの事は希臘神話に出でし故事）つきてはアントニオさま、小生の依頼といふはこゝの事、若し小生に、是等夥多の貴公子と、對抗する丈の資力さへあるならば、年來の宿志を遂げて、三國一の果報者と、受合つてなれる所存。

アントニオ　ム、實は卿も知らるゝ通り、小生の財産といふは、皆海上に浮べる品、今は生憎現金もなく、又金子に換ふべき商品も有たぬが、これより出掛けて工夫せば、何うがな才覺がつくであらう。依むところは、ヴェニス市中での拙者の信用、この信用の屆かんかぎり、金子を整へて見たならば、ポルシア姫の候補者の一人となり、ベルモントまで打つて出てん軍資に事は缺くまい。さア卿もとく出掛けて、心當りをきいてくれよ。拙者も直に金子の有る場所に向はう。拙者に對する信用やら、友誼やらの力にて、これしきの金子が調はぬことはよもあるまい。

と兩人退場

第二場　ベルモント　ポルシア邸の一室

ポルシア（富家の女主にてすぐれし美人）子リサ（前者の腰元）登場

ポルシア　これ喃、子リサ、このさゝやかな身一ッが、廣い世界に置き所なく、浮世が厭で〳〵ならぬわいなア。

子リサ　そりやお姫様御無理と申すもの、幸福なことばかり續きませいで同じ程に不幸なことの續くなら、浮世が厭もきこえまするが、何の月圓滿なる和女の御身の上——尤も見渡すところ、世の中は、有り剩る

のも、なか〳〵難有くはない樣子。日頃山海の珍味に飽くものは、空腹をかゝへて、饑飢に泣くものと、何方も痛いものとやら。さすれば、この世にて、中庸の生活を送るのは、餘程お目度きわけ。つゞまるところ、飽食暖衣は却つて年波の早う寄る基、過不足のなき生活が、無病長生の源とやら申しまする。

ポル　おゝ神妙な物の言ひぶり、其方も中々隅には置けぬわいな。

チリ　言葉通りに、これが一々、行ひ得るものならば、格別結搆にムりまするが。

ポル　それが何より六ヶ敷ものなのぢやわいなア。若し心によしと思ふ事が、さながら實地に行はるゝものならば、草の庵は大伽籃、賤の藁屋は、やんごとなき方々の住まはるゝ殿宇ともなるであらうぞ。心によしと思ふことを、さながらに行はんは、それは格別優れたる名僧碩徳ならでは協はぬ仕業。二十人の群衆をあつめて、説敎してきかせるは易けれど、その二十人の一人となりて、敎へられたる件々を、身に行ふは幷一と通りの苦心では思ひもよらぬ。いかばかり頭腦を絞りて、心の慾を抑へる爲めの法則を定めんとも、むら〳〵と湧く情熱は、事もなげに、その冷かな規憲の墻を乘り越す習。血氣に燃ゆる若者の、心の駒の一たび狂へば、その勢は、さながら網をくゞる脫兎の姿、小言や忠告の、覺束なき足元では、とても手に負へたものではないぞえ。それはさうと、かゝる理窟は、差迫つた、身の良人選びの役には立たぬ。イヤ選ぶといふも耳ざはりな。好いた殿御を選びもならず、好かぬものをも拒まれぬが妾の身の上。亡れ玉ひし父君の、仰せ一ッに縛られて、この

儘ならぬ浮世をかこつ身の因果喃ネリサ、生涯連添ふ良人を定める
に、好と不好とを選別る權能を有たぬとは、何と痛い身の上ではある
まいか。

ネリ　これいなアお姫樣和女の父君は、日頃陰德を積まれしお方。シテ善
人の正に死せんとする時は、其の心は神の意に通ふとやら。さすれば、
金と銀と鉛との三種の手筥を作られて、之に書きつけた文句により、
御父君の眞意の程を洞察せ、首尾克當てた御方を、姫樣の婿君にする
といふ、あの運定めの抽籤法は、受合つてすぐれし御趣工、心から姫樣
を愛されて居る殿御ならでは、其の貴い籤に當る筈は厶りませぬ。さ
るにても、これまで數々まゐりましたる貴公子の中にて、和女のお思
召は、何誰に御座りまするぞえ。

ポル　一人づゝ、その名をいうて見や。其方が名指すにつれて、品評をする
程に、篤と言葉の表裏を見て、妾の好不好を推し測るが善い。

ネリ　さらば、先づ、あのネーブルスの殿樣は何と思召めす。

ポル　あの方かいな、あれは野馬……。でもその證據には平生の話柄まで
も、御自分の馬の風評で持ち切つて居られる。そして御自分の手にて
蹄鐵を附着るのを、何よりの技倆として御自慢なさるゝわいな。よも、
あの方の母御が、鍛冶工と不義もされまいに。

ネリ　さらば、あのパラタイン伯爵の君は、

ポル　あの方は毎々苦虫を嚙みつぶされたやうなお顏容、「拙者が好かぬ
なら好かぬでよい、勝手にせい」と言ひたげの御人躰、可笑しき物語を
きかされても莞爾ともなさらぬ。お齡が若くてさへかくの通りであ

るなら、若しも、あれがお齡を召された曉には、希臘の泣博士とやらんに似もせうぞ。（紀元前六世紀に住める希臘の博學ヘラクリタスの異名）妾はこの二人とも何れも好かぬ。かゝる方々よりは、人骨を口にせる死神の妻と呼ばるゝが、遙かに本望。おゝあれを良人などゝは、思ひ出してもぞッとする。

ネリ　では、あの佛蘭西の貴族ル・ボンさまにおかせられては。

ポル　さればいなア、あれにても人間の片割かいな。よも木の叉から生れた妖怪變化の類でもあるまい程に……。アレ妾とて、人を嘲ることの罪深く、末畏ろしい位は存じて居る。さればといふて、あの方は又格別。ネーブルスの殿よりも馬狂、又バラタイン伯よりも苦蟲の癖が強いのぢやものを。器量より言へば半人前、癖にかけては千人前、鶫が鳴けば跳りあがつて、のけぞり玉ひ、相手がなければ、御自分の影法師と決鬪もなし玉はんず勢。若し彼樣なお方に連添ふなら、二十人の良人に册くほど氣骨が折れやう。後生であるぞえ、ル・ボンさま、萬望この妾をば嫌つてたべ。嫌つてくだされば、善いお見ぢや、夢中になつて好かれたとて、そのお相手は出來ぬわいな。

ネリ　さらばお姬樣、まだお齡のわかい、あの英吉利の男爵、フォクンブリッヂさまは。

ポル　其方も見やる通り、まだ、あの方とは挨拶一つせぬわいな、互の言語が通ぜぬものを。あのお方は、羅典語も、佛蘭西語も、以太利語も、いづれも不得手、又妾が、いさゝかも英吉利語を知らぬは、其方も善う知つて、知り拔いて居る筈。外觀から言へば、あの方は優れし美丈夫、とは言へ、案山子との問答には誰しも窮るぞえ。のみならず、奇怪に見ゆるは、そ

の服裝、思ふに、あの胴衣は以太利にて整ひ、あの圓く膨れた股引は佛蘭西、又帽子は日耳曼と、一々異つた土地にて調製ひ、又あの擧動態度は、世界各國の寄物ではあるまいか。

子リ　さらば姫さま、あの方のお隣なる、蘇格蘭の殿は何と思召めす。

ボル　あの方は、隣同志の交際に、義理固いお方であるぞえ英吉利のお方より、ボカリと一ツ横面のお見舞を受けると、このまゝ默つて頂戴致しては相濟まぬ、何れその中御返禮仕ると、固い誓詞を立てられたさけば佛蘭西の殿が又、この方の證人となりて、調印の上に、全じく横面の返禮を誓つたとやら。（當時英國は蘇國を壓迫し、佛國は常に蘇國に聲援せり。此國際的關係をボルシアの許に来る貴公子どもの事に書きたる也。蓋し俗受けの猾手段也。）

子リ　さらばサキソニー公の甥御さまとやら承りまする、あの日耳曼の

若殿はお氣に召されましたか。

ボル　あの方かいな、朝の間は白面で居られるが、それで、事の外鄙陋らしいお方。午後には御酒を召されて、その時は並外れて鄙陋らしい御機嫌の殊にすぐれし時が、やゝ人並にとゞきかね、御機嫌の最も惡い時には、鳥や獸にやゝまさる。若しも妾の運拙く、籤があの方に當りもせば、その曉には、一生の智慧を絞りて、一所に捿まぬ工夫を致さうぞえ。

子リ　さればと申してお姫樣、若しあのお方が抽籤に加入されて、そして肝腎の當籤をお引き遊ばされたなら、いかに藻掻かれたとて致方がムりますまい。それを不好と仰せられては、それでは御父君の御遺言に背かるゝではムりませぬか。

ポルそれ故、さる難題の起らぬ先きの呪禁に其方に一ッ依頼があるぞ。すぐれて醇き葡萄の美酒を、なみ〳〵と大きやかな盞に盈たし、それを空籤入れたる手筥の上に載せてたも。裡には惡魔、外には酒の誘引物がある上は、あの方がその筐に手を出さるゝは必定。哺チリサ、かゝる酒樽の宿の妻と成りさがる前には、いかなる手段も仕盡して見るぞえ

ネリ事實を申せば姫樣、右に申上げました殿方のことならば、最早御配慮には及びませぬわいな。右の方々は、御父君の工夫遊ばされた、手筥の抽籤法には何れも不承知、何ぞ他の仕方によりて、姫樣をお手に入れ遊ばすことの協はぬ上は、即刻本國に立ち戻り、この上御邪魔はせぬと、何れもその決心の程をば、妾の許まで、申越されてムりまする。

ポルそれは又願ふてもなき僥倖ではある。妾は飽まで父君の遺言を守らん覺悟、若し父君の御指圖にいさゝかも背くとあらば、よし千歲の末まで生き延びんとて、月の女神が妾にとりて善い龜鑑、ゆめ〳〵男性の肌には觸れぬ。さるにても右の殿原が、何れも溫なしう、よく事の譯をきゝ分けて呉れたのは何より目出度いことではある。一人として、懷かしい、引きとめたいと、思はるゝお方はないものを。

ネリでは、お姬さま、御父君尙ほ御在世の砌、訪問れ玉ひしヴェニスの紳士、――モントフェルラット侯爵のお侶伴の中にて、學者とも、武夫とも、一きは目立ちし若殿がムりましたな。まだ、あのお方をお忘れになりませぬか。

ポルそれは忘れぬわいな。あれはバッサニオ樣……。たしか、さう言ふ御

名の方であつたと記臆えて居るが。

チリ　ホンに左樣てムりました。あの御方のみは、この不束な妾の眼にとまつた殿方の中にて、麗人の配と、呼ばるゝに相應しい、立派な殿御と見られました。

ポル　妾もあの御方は善う記臆えて居るが、ホンに其方の言やる通り、優れた御方ではあつたのう。

下僕の一人登場

下僕　おゝ何事でおりやる。何ぞ用事かや。

申上まする。只今御四人連の異國の方が御姫さまにお告別の爲め參上されました。又外にモロッコ公子とやらよりの先驅の使者が見えましてムりまする。シテその御主人が今夜爰にお入來との口上にムりまする、

ポル　ハテ承知したわいな。その四人の方々に暇を告げるは嬉しけれど、迎へる一人がさて氣懸りな。モロッコ公子といへば、その皮膚は闇夜の烏、色の黑さが思ひやられる。心の中が善かれ惡しかれ、なつかしい人品とも思はれぬ。

チリサおじや。（僕に向ひ）又其方は一足先きへ。一人を拂へば。一人が來る。ハテ辛氣なことぢやなア。

と一同退場

第三場　ヴェニス市　一旗亭

バッサニオ（前に出づ）シャイロック（金貸の猶太人）登場

シャイロック　フム三千兩――シテそれを。

バッサニオ　三ヶ月間借用したい。

シャイ　フム三ヶ月間――シテそれを。

バッサ　既に述べた通り、右の金額に對して、アントニオが證書を入れるのぢや。

シャイ　フム、アントニオが證書を入れる――シテそれを。

バッサ　それにて金子を貸すか、貸さぬか、諾否の返答一時も早う聞かせて欲しい。

シャイ　フム三千兩を三ヶ月――シテ、アントニオが證書を入れる……。

バッサ　その返事を早く聞かせい。

シャイ　フム夫のアントニオならば、先づ資格の善い人物ぢやテ。

バッサ　何ぞアントニオに就きて悪評でも耳に入れられたか。

シャイ　何……何んで左樣のことが。拙者が只今資格の善いと申したはそれは充分の有力家ぢやと申上げる所思なので――尤も考へて見れば、アントニオといふ方の資産といふは、あれは隨分浮雲き遣繰の品ぢやテ。ありとあらゆる財産は皆波の上、一隻の親船は、トリポリス(亞弗利加)に航海、他の一隻は又西印度に航海中。尙ほ市場にての傳聞によれば、墨國にとゞまるもあり、英國に向へるもあり、その他、外國の港灣〱に撒布つて居る所有の商船が數多くある趣。が、御覧じませ、船舶と申すものは、ホンの板子の集合物、船子と申したところが、普通の人間、陸鼠あれば、水鼠あり、陸盗人あれば、海盗人の、ソレ海賊といふ物騒な奴が居まするぢや。それから又、浪、風、岩等の危險もある。こりや容易

バッサ「これがアントニオ氏ぢや」
シャイ「フンあれを見い。彼奴の様子は…………」

に高枕をして眠られはしませぬ。とは言ふて見るものゝ、あの方は有力家ぢや。フム三千兩――ではアントニオ氏調印の借用證を引受けて見るか。

バッサ　引受けて決して心配はムらぬ。

シャイ　勿論心配のないやうにせねばなりませぬ。さて心配を無くするには、篤と熟考致して見ねばなりませぬ譯。時にいかゞでムりませうな、アントニオ氏にお目に懸るわけには參りますまいか。

バッサ　それには晝餐を共にしやうではないか。

シャイ　そして、あの豚肉の臭い奴を嗅ぐのでムるか。救世主が惡魔を追ひ込んだと申す、アノ豚の肉を食ふのでムるか。(豚肉は猶太人の禁物、聖書にある一奇蹟より出てし迷信)拙者は貴所方と貨物の賣買は致しまする。談話もしまする。散歩

もしまするその他何なりと仰に從ひまするがたゞ貴所方と飲食を共にするのみは眞平御免を蒙りまする。市場の邊にて近頃珍らしい事もムりませぬか。——ヤ何誰か其所に見えた樣子。

アントニオ登場

バッサ　これがアントニオ氏ぢや。

シャイ　〔傍白〕フンあれを見い。彼奴の樣子は、權威に阿附る收税吏そのまゝ、我慢にも二た目とは見られぬ。先づ彼奴が耶蘇信者であるのが憎いが、それよりも、取りわけ憎きは、日頃無法にも、無利息で金子を貸すことぢや。これが爲めにヴェニス在住の吾々金貸業者が命の綱の、利息の割合がます〳〵低廉る。アヽ若しもたゞ一度、彼奴の急所を壓へることが出來たなら、年來積もる怨恨をば、など晴らさずにおくべき

ぞ。畏れ多くも曇りなき、わが猶太の民衆に惡意を挿み、場所もあらうに、四方の商估の格別繁く雲集ひ來る市場の裡にて、このシャイロックに惡口雜言、拙者が日頃營める肝要の職業をば、糞味噌に貶し、汗水垂らして贏けたる貴い金子に、利息の名を附けて嘲弄す。彼奴を容赦して置くやうで、何て猶太人の顏が立つものか、

バッサ　これ〳〵シャイロック、何を致して居るぞ。

シャイ　へ、拙者は今手元に揃つた現金の額について、胸算用をして居ましたので。大凡の見當では、即時に三千兩全額、耳を揃へて調へることは出來さうにもムりませぬ。――イヤ併し御心配めさるな。拙者と仝族にチュバルと申す長者が居りまするが、仝人に申込まば、金子は必らず整ひまする。イヤ少々お待ちくだされ。期限は何ヶ月との御注文で

ムりましたな――(アントニオに向ひ)これは〳〵お珍らしう。拙者どもに取りて、誠に思ひ懸なき華客さまにムりまするナ。

アント　イヤ、シャイロック、貴公づれとは違ひ、拙者は日頃金錢の貸借に利息の遣り取りは致さぬが、たゞ今回丈は、親友の急用もたし難く、日頃の習慣を破ることに致した。(バッサニオに向ひ)いかゞでムるな、所要の金額の所は、まだ申されませぬか。

シャイ　ハイ〳〵三千兩といふ御注文で。(と話を受ける)

アント　シテ返濟の期限は三ヶ月。

シャイ　おッと悉皆それを忘れて居ました。――三ヶ月、ホンニさう言ふ御注文でムりましたな。(バッサニオに一瞥す)では證書をお入れくだされい。さすれば、その……。ヤ少時お待ちくだされい。貴所樣の只今のお言葉で

は、たしか、金錢の貸借に、利息は取らぬとの仰せにムりましたな。

アントン　いかにも利息などは取らぬ。

シャイ　イヤそれに就いて想ひ出でましたのは、ヤコブが叔父レーバンの羊群を監督せし時分の事蹟――ヤコブと申す御方は、その賢しい母のお蔭によりて、畏れ多くも、神祖アブラハムより、第三代の宗主と仰がれし御方でムるな。左樣たしかに第三代の宗主と……。

アントン　そのヤコブがいかゞ致したと申すか。利息でも取つたと申すか。

シャイ　イヤ利息は取りませぬ。貴所樣の被仰るやうな、正眞の利息は、取りませぬわい。先ア篤とお聽きくだされい。右のヤコブは、叔父レーバンと約束を結び、若し條文なり、斑點なりの、毛弁をせる仔羊が生れたなら、雇賃として、それを貰ひ受けることに決めましたので。やがて秋も暮れ交尾の時期に向ひますると、牝羊は牡羊の後を纒けつ、廻しつ、子孫繁殖の道を講ずるに忙がはしい。時分はよしと、流石は斯道に老熟い牧羊者の妙案、一種の木の枝の皮を剝ぎて、交尾の最中に、それを牝羊の眼の前に立てた。それから、その羊どもが懷姙と相成り、やがて出産期に及びて、產みおとしたる仔羊を見れば、何れも皆斑點入りのものばかり。乃て、これが悉皆ヤコブの所有に歸したと申すお噺。金錢を贏けるものは、皆斯うしたもの、さうなると、上帝さまも自然見離さぬ道理。げに又不正の業さへ働かずば、贏けた金銀財寶は皆天帝さまの恩賜に相違ムらぬ。

アントン　アイヤ、ヤコブが試みたるは、それは一種の冒險に過ぎぬ。自己の力にて作りあげしにあらずして、一切上帝の御手に鹽梅されたのぢや。

貴公は利息を取ることの辨解として、之を引例に出したか。それとも又貴公の金錢が、牝羊や、牡羊の類でもあるか。

シャイ　さアそれは拙者にも分り兼ねまするが、兎に角、金子も羊幷に、どし〳〵増殖すことは出來ますわい。――それはさておき、一ッ御相談の儀がムる。

アント　あれ見たか、バッサニオ、口は調法、惡魔のくせに、聖書を楯に引く法もあると見える。地獄の鬼の身にて、神明を笠に着るは、例へば腹黑き小人が笑顔をつくり、又外見の美事な林檎の中心が腐つて居る類。あゝ僞物の外觀倒しには呆れるのう。

シャイ　口でこそ三千兩といふものゝ、こりや容易ならぬ大金。一年十二ヶ月の中より三ヶ月を數へると、さて其利息は幾何にならう……。

アント　時に、何うぢや、シャイロック、金子のお世話はして呉れる氣かいな。

シャイ　世話をせぬと申す譯もムらぬが、喃アントニオ樣、拙者が金貸業を營んで居るといふので、貴所樣は、人混みのする市場に於て、何回拙者を罵られたか知れますまい。たゞ拙者は、眤と勘忍の臍を固めて溫しく默つて居ましたが、これといふのも、吾々猶太人の辛抱强いからの事。なア貴所は、拙者を捕へて何と言はれた。ヤレ人非人の邪敎徒、ヤレ無宿の犬畜生と、言語に絕えたる惡口雜言。そして拙者の上衣に唾液を吐かれた。シテ其侮辱の理由はと問へば、拙者が、自己の物品を、自己の手に運轉したと言ふまでの事。然るに今となつて、何うやら拙者の助力が、惜しげの口吻、餘りといへば胴慾ではあるまいか。貴所は先刻何と言はれた。「これ〳〵シャイロック、金子を貸せ」――ナントそれに相

達ムりますまい。拙者の顏に痰を吹きつけ、戸口に彷徨く野良犬同樣拙者の軀を土足にかけし、その貴所が！貴所の今欲しきは金子ぢや。拙者は、之に對して何と返答をしたらば善からうか。「戲弄るな、畜生に金子があるか。山狗の分際で、何で、三千兩の金子が貸せるか」と、一と思ひに言うて除やうか。それとも又、ひたぶるに低頭平身、奴隸染みたる猫撫聲、氣息を潜め、口をすぼめて、「これは〳〵華客樣、この間の水曜には、この數ならぬ拙者に唾液をかけてくだされ、何日ぞやは御土足に蹴てくだされ、又しか〳〵の折には、畜生ッと玉の御聲を懸けてくだされました。誠に身にあまる光榮、その御返禮として御用の金子を差上げまする」とでも、言ふて見るか。

アント　イヤ拙者の仕打には今後とて變りはないぞえ。拙者は從來通り、貴公を捕へて、犬とも呼ばう、唾液も懸けやう、蹴飛ばしもせう。されば貴公が、今三千兩の金子を拙者に貸すにしても、朋達に貸す氣では、貸さぬがよい。――勿論又朋達の間柄で、金錢の貸借に利息を取る法はないから喃。寧ろ仇敵に金子を貸す所思で居られい。されば、萬一約束に背きもせば、些末の遠慮會釋をするには及ばぬ。直に拙者を刑罰に當てられい。

シャイ　これは〳〵强烈い御立腹、さう言はれては話がなりませぬ。實を申せば、行々は貴所樣と和睦を致して、親しくお目をかけて戴き、これまで受けし戮辱をば、さらりと水に流したき拙者の本心。今回御用の金子を差上げるに致しても、利息などは一文も頂戴せぬ決心にムりまする。それをお聽許なきは不本意千萬。拙者は單に、好意づくから申上

げて居りまするのに。

アント　それが眞實ならば誠にその好意の程は辱ないが。

シャイ　然らば、その好意を實地にかけて見せまするさァこれより、公證人がり、拙者と御同道なされませ。そして證書が出來た上は、保證人の儀には及びませぬ。貴所さま御一人の、調印を願ひたうムる。ところで一ッ、戯れに、若ししか〳〵の日、しか〳〵の場所に於て、證書面にのせたる、しが〳〵の金額を返濟されぬに於ては、其科料として、拙者の隨意に、貴所さまの身體の肉、正に一斤を頂戴するなどゝ、假りに決めて置かうてはムらぬか。

アント　ムゝそれは面白い、承知致した。拙者は、左樣の證書の調印は辭退致さぬ。シテ猶太人にも人情があると觸れてくれやう。

バッサ　アイヤ拙者ゆゑに左樣の證書に調印などせらるゝな。拙者は寧ろ、窮しくともこのまゝ辛抱致す。

アント　何んの左樣の配慮は一切無用、拙者に於て決して粗漏はない。今より二ケ月以內、即ち證書の期限が盡きる一と月前に、證書面の金額に比して、三倍の價格の貨物が、歸着する手筈になつて居る。

シャイ　これは〳〵愛憎の盡きる、耶蘇信者達ぢやなァ。御自分達が、他人に對して、冷酷たらしい仕打をするので、他人の肚裏をも疑ぐるとは、ハテ、サテ笑止！喃皆樣、考へても御覽じませい。よしアントニオ氏が、期限の日を誤つたと致して、拙者がその賠償の品物を請求せば、何の利益がムる。一斤の人肉は、羊、牛、山羊などの肉ほど珍重もされねば、又賣つたとて高値もせぬ。拙者は折角貴所方の歡情を求めんとして、かく

まで好意を表して居る。若し此拙者の好意を受けて呉れるとあらば、それにて滿足。さなくば、これにておさらばぢや。願くはこの芳思を汲みとりて、邪推の段はゆるしくだされよ。

アントン　承つたぞえ、シャイロック。拙者は右の證書に調印するぞ。

シャイ　さらば公證人の許にて何れ後刻、お目にかゝりまする。世にも風變りの、この證書、その認め方は、貴所樣のお手にて、よしなにお指圖を願ひまする。拙者はこれより即刻歸宅、御用の金額を懷中致して、お後を慕ひまする。留守宅を油斷のならぬ手代に任せて置きたれば、それをも序でに巡檢つてまゐる筈。

アントン　早う行つてまゐるがよい。

と　シャイロック退場

イヤあのヘブリュー人は、何うやら眞人間の仲間入りが出來さうぢや。追々親切氣がきざす樣子。

バッサ　と言ふて、口端に甘き蜜を有ち、肚裏に毒を藏せる佞人に油斷はなりませぬ。

アントン　イヤ早く參らう。この一事につきては、ゆめ〳〵配慮あるな。期限より一ケ月以前に、拙者の船が、歸着するほどに。

と兩人退場

第二幕

第一場　ベルモント　ボルシア邸の一室

コルチットの囃子。モロッコ公子及び其扈從。ボルシア、ネリサ、及び從者の面々。登場

モロッコ公子　身どもの顏色の黒きを見て嫌つてくださるな。言はゞ揃の黒裝束、光輝はげしき日輪の、隈なく照す暖國にては、共通の色でおじやる。剱戟取つては、これでも天下無双の豪者、射す日光の影薄く、氷柱の裡に日を送る、北國産の隨一の優美男子を連れて來て御覽じませ。身どもと比べて何方の血汐が紅なるか、互に疵を附け合ふて、戀しき君樣のお眼に懸けう。（土耳其にては愛婦の面前にて疵を附け、以て愛情を表する習慣あり。又血の赤きは勇氣のすぐれし證とせらる。）憚り乍ら姫、身どもの面魂にはいかなる猛者でも畏縮せぬはない。又この顏が、本國の姫御前どもから、ヤンヤと言はれて居るのも事實。最う些とばかり白くありたいなどゝ、思ふのは、君樣如き優しい御方から、聊か好かれたいとの弱身があるばかり。

ボルシア　あれいなア殿方の品評にたゞ眼先きばかりを典據とする妾ではないぞいな。のみならず、籤てふものは運否天賦、わが身の自由にはなりませぬ。さりながら、何時ぞやも申上げし、亡父の遺言、籤に當つた御方を良人にせよとの仰せさへなかつたなら、世にも名高き貴所樣のことぢやもの、これまでの何の御方に比べたとて何の不足がムりませうぞえ。

モロ　おゝそれ承つて滿足致した。左ある上は、是非籤を藏たる、手筥とや

らに案内して、運試しをさせてくれい。畏多くも、嘗ては波斯王を斬つて棄て、まッた同國の王子にして、三度土耳其王を打負したる、えらい履歴の御方をも見事に仕留し、この腰なる一刀の手前、露以て詐りは申さぬ。君さまの爲めには、いかに佞悪しい眼光の漢子をも睨め倒し、いかに野蠻暴戾の猛者をも撲り飛ばして見せう。牝熊の手から、その哺乳兒を引離しても見せう。アイヤ腹を減らして餌食をあさる獅子でも、翻弄つてお目に懸けう。——と言ふて、あゝ此勇氣も、さし當つての、戀の役には立たぬから殘念ぢや。かの希臘の軍神ハーキュリイズといへども、その家來のライカスと、雙陸の勝負を以て戰ふたなら、隨分運の向き方一ッにて、家來の弱蟲が、點數多き骰子の目を轉がし出さぬとも限らぬ。かくしてこの力の神もその家來に負ける譯。（ライカスはハーキュリイズの臣也、毒衣を主に着せて死に至らしむ、ハーキュリイズ死に先立ち、ライカスを岩に叩きつけて殺す、）これと同じく拙者とても、見るに眼のない運の神にあやつられ、取るにも足らぬ下賤奴に、寳の玉を横奪されて、世を味氣なく、狂死に死ぬやも知れぬ。

ポル　何れともお試しの上にムります る最初より抽籤に加入されぬと仰せあらば、それは貴所さまの御隨意、若しも御加入ある上は、外れし上は。生涯何れの婦人にも、結婚は申込まぬ」と固い誓約を立てゝ戴くのでムりまする。それゆゑ、迂濶とはなされますな。

モロ　他の婦人に結婚などは申込まぬ。いざ拙者をば早く運試しの場所に案内してくだされい。

ポル　イヤ先づ寺院に——抽籤は午餐の後にて願たうムりまする。

モロ　都合よく行つてほしいものぢやなア、その時は！願協つて三國一

の果報者となるか、それとも外れて男子の中の不覺者となることか。

とコルチツトの囃子、一同退場

第二場　ヴェニス市　街頭

ランセロット（シャイロックの下男にて道化者）登場

ランセロット　エヽ、あの猶太人の、旦的の家などから出奔したとて、格別譴めるやうな良心でもあるまい。鬼どのは俺の耳元に口をさし寄せ「これ〳〵ゴボ……ランセロット・ゴボ……ランセロットどの……」では無かつた。「これ〳〵ゴボどの……」でも無かつた。「これ〳〵ランセロット・ゴボ殿、脚があるなら、足元から鳥の飛び立つやうに逃げてしまへ」と、出奔をすゝめる。すると我良心は、それを遮り「それは以ての外の了簡違ひ、愛ナ正直者のランセロット、氣をゆるすな。愛ナ正直者のゴボよ、氣をゆるすな……。」イヤ矢張り上に言つたやうに「愛ナ正直者のゴボ・ランセロット殿よ、逃げてはならぬ。驅落などには、後足で土砂を打つかけて振り向いても見なさるな」と言ふ。すると度胸の据はつた鬼どのが、重ねて出奔をすゝめ「さア〳〵」だの「いざ〳〵」だの「とく勇を振つて構はず逃げよ」だのといふ。さア良心どの御心配、俺の胸倉に縋りついて、分別臭いことを言ふ。「愛ナ正直者のランセロットどの、お前は元より正直な父の悴」――こりや實は、正直な母の悴と言はねばならぬところで、父親の方は、チト黄ナ臭い、プンと鼻に來るやうな事をしたといふ話。それはさておき、良心の方では「これランセロット出奔をするな」。鬼の方では「出奔をせい」。重ねて又良心の方では「出奔をするな」。仕方

がない、今度は自分の番。「これ／＼良心、全くお前の言ふ通りだ」「これこれ鬼、全くお前の言ふ通りだ。」――良心の勝手になれば、俺の身は旦的の家に留まらねばならぬが、済まない口上だが、旦的は悪魔の片割だ。若し又旦的の家から逃げ出せば、鬼の配下につく譯だが、鬼といふものは、憚り乍ら悪魔の正躰だ。何れにしても進退谷るが、兎に角旦的は、あれは悪魔の化身に相違ない。又俺の良心は斯ンな旦的と同居せいと、勧める位の良心であつて見れば、良心中でも餘程六ヶ敷家の方だらう。之に比ぶれば、鬼は餘程深切な忠告をして呉れる。ヨシ／＼鬼、俺は逃げ出すぞ。行くも留まるも貴公の仰せたゞ一ッ、俺は逃げ出すぞ。

父のゴボ笊を提げて登場

ゴボ　若し／＼若旦那、シャイロックといふ猶太人の邸宅へは、いかゞ参るのでがすな。教へて戴きたいものでムります。

ランセ　[旁白]オーヤ、オヤ／＼／＼! こりや俺の肉親の親父どのぢやないか。日頃眼病で霞眼の域は、夙に通り越し、最う闇雲眼位になつて居るが、道理で俺の顔が分らずに居る様子。よし／＼これから御撿分に出掛けて呉れう。

ゴボ　モーシ若旦那、シャイロックと申す猶太人の御宅へは、何う参るのでがすか、教へて戴きたうムります。

ランセ　次ぎの曲角を右に曲つて行きなさい。最も就中その次ぎの曲角は左に折れて行く。それから、その次ぎの曲角では、是非右にも折れず、左にもそれず、遠廻しに、ぶら／＼と、その猶太人の家へ舞ひ込んで行かつしやい。

ゴボ　ホ、ホーこりや一と通りの、分り難い場所ぢやない、時にその御方の御宅に、ランセロットと申す小僧が同居して居る筈でがすが、今でも矢張同居して居るか、それとも居ぬか、御存知はムりますめいか。

ランセ　ナニお前は、若様のランセロットさまの事を聞かれるのかいな。〔旁白〕さア皆様よく御眼をとめて御覧じませ。これより親父の眼から雨を降らせまアする。――なア御老人、お前の尋ねる御方は、若様のランセロット様の事かいな。

ゴボ　イヤ若様などゝ申す立派なものではムりませぬ。ホンの貧乏人の小僧でがすわい。實はかく申す拙者がその小僧奴の親で、自分の口から申上げるのも異なものでがすが、これでも至つて正直な、至極の貧乏人、お蔭様で、何うやら安樂に生計を立てゝ居ります。

ランセ　親などは何うであらうと御勝手、俺達は、若様のランセロット様の話をして居るのだ。

ゴボ　して見りや、貴所樣とは御別懇の間柄と思はれますだが、矢張單獨のランセロットで澤山な奴て。

ランセ　それ故願つて居るてはないか。それゆゑ拜んて居るてはないか。お前は若様のランセロット様の話をして居るのかといふに。

ゴボ　ハイそのランセロットの事て。

ランセ　それ故若様のランセロット様のことだと言ふて居るにが、しかし親父さん、若様のランセロット様の話はお廢しなされい。この御方は、前世の因縁とやら、定命とやら、天命とやらで、モー現世には亡い人だよ。イヤお前達にも分るやうに、モット平易言ふと、あはれ果敢なくも、黄泉

の客となられた。

ゴボ　ヒャーそりや飛んでもねい話ぢや！小僧奴は俺の老後の、杖とも柱とも、日頃依頼にして居たのに。

セラン　これ〳〵お前の眼には、俺の軀が天秤棒、支へ棒、杖、柱の類と見えるのか。俺の顏が分つたか親父さん。

ゴボ　アーア若旦那、貴所樣が何誰樣かは存じませんてがすが、自家の小僧が生きて居るか、それとも死んだか、早く聞かせて、安心させてお呉ンなせい。

セラン　これ〳〵親父さん、俺の顏が分らないかよ。

ゴボ　情ない事には、拙者は霞眼、頓と分りませんてがす。

セラン　イヤお前は眼が明いて居たとて、元來の文盲者、とても俺のことは分るまい。餘程眼識のある父親でなければ、吾が子の判別はつかぬものだ。さア親父どの、お前の悴の身の上を語つてきかせる「跪くこと」先づ俺の無事でも祈禱してお呉れ。隱すより顯はるゝはなしとやら、穗に出るものは尾花に限らぬ。人を殺して、誰が最後まで隱し果せた。人の子は隱せるものゝ、それでも終にはわかる習ひ。

ゴボ　これ〳〵立つて見せて呉れよ。お前がよもや、悴のランセロットではあるまいが。

セラン　これ〳〵親父どの、戲談はこれにて中止、先づ祈禱でも依みます。何を隱さう、斯くいふ拙者がランセロット、さきにはお前の悴、行々はお前の御令息、現下にてはお前の赤ン坊。

ゴボ　いや〳〵悴とは、何うしても受取れぬ。

ランセ　お前が何と言はうとて、兎に角俺はランセロットだよ。シャイロックの下男だよ。そしてお前の女房のマーガリーといふのが、たしかに俺の母親だ。

ゴボ　成程俺の女房はマーガリーと言ふ名前だつた。して見ると、貴様が若しランセロットに相違なくば、矢張俺の肉親の悴に相違ない道理。ヤーレヤレ〳〵こりや難有い話――ヒャー貴様は何といふ鬚面になつた。（ランセロットの後ろ向きになれるを知らず、頭髪を撫でゝ見て鬚と誤ること）顋の毛が、自家の荷馬のドビンの尻尾よりも濃く生えて居る

ランセ　して見ると、ドビンの尻尾は逆に生いて來ると見えるナ。先達見た時分には、たしかに彼奴の尻尾の方か、俺の顋の毛よりも濃かつた。

ゴボ　ヤレ〳〵貴様は見違ひるやうになつたなア。何うぢや旦那樣との折合は善いか。俺は旦那樣に手土產を持參した。折合はよいかよ。

ランセ　左樣、何ンなものかなア。尤も、兎に角、俺の方では、驅落と腹の蟲を据ゑた以上は、五里か、七里、突ッ走しつた上でなければ、決して落着くことではない。自家の旦的は橫から見ても縱から見ても、正眞の猶太人、眞人間ではない。旦的に手土產を持參！　笑はせるぜ。それよりも絞首の索でも呉れてやるが善い。俺は彼樣ナ家に奉口して、お蔭で全然干乾になつて仕舞つた。これ覧なさい、一本〳〵身躰の指が、肋骨で勘定が出來る。何れにしても親父さん、お前は善い機會に來て呉れた。その土產は、そツくりその儘、バッサニオ樣と申す若旦那に贈つてお呉れ。その若旦那は、立派な定服を下男等に被せるぜ。若しこの旦那の家に、奉口が出來ぬに於ては、千里でも二千里でも何處迄でも俺は逃げて行

く分の事——ヤ風評をすれば影とやら、甘い所へその若旦那か來なすツた。さア親父どの、早速行つて依んでお呉れ。この上猶太人の旦的などに奉口して居りや、自分も猶太人の片割、人間ぢや無い。

バッサニオ及びレオナルド（前者の下男）其他從者登場

バッサ　おゝそれにて差支はない。尤も成るべく取急ぎて、晩餐の用意は遲くとも五時までには調ふやうにせい。又これなる書狀を、先方に手渡すとを忘るゝな。それから定服を注文し、その足にてグラチアノを訪問れ、直ちに邸へ參るやう傳へてまゐれ。

と下男の一人退場

ランセ　親父どの、さア御挨拶〳〵。

ゴボ　畏れながら旦那樣！

バッサ　おゝ誰ぢや！何ぞ身に用事があると申すか。

ゴボ　こりや拙者の悴でムりまするが、可哀相な小僧て………

ランセ　（父を押しのけて出張り）エヽ可哀相な小僧ではない。畏れながら、あの金滿家の猶太人の下男でさし當り、後生一生のお願がムりまするが、詳しい事は、（と父の背後にさがり）これなる親父が申上げまする。

ゴボ　別儀でもムりませぬ、悴奴の希望といふは、世に言ふ御奉口の筋で………。

ランセ　（又出張ること）長い短い、搔いつまんて、手短かに申上げまするて、實は拙者は、あの猶太人の奉口人で、所が一ツ旦那さまにお願があります。と申すは（と又引込むこと）何れこれなる父が、これから申上げまする。

ゴボ　旦那さまの前ながら、その猶太人と悴とは、何うやら、その犬と猿、餘

り折合が宜くも無いやうな譯で。

ランセ　（又出張ること）早い話が、實は此猶太人の旦的奴が、拙者に對して非道の振舞、乃て、拙者も勘忍ならず、終にその、（又引込むこと）イヤ詳しい事は拙者の親父も、流石老人の事故、これより段々申上げまする。

ゴボ　旦那さまこの通り拙者は鴿を持參して居るでがす。これは旦那樣へ差上げたうムります。所で、拙者のお願の筋と申すは……

ランセ　（又出張ること）手短かに言つて仕舞ふと、お願の筋と申すは、かく申す私の身に干渉した問題、何れ段々親父の言葉をお聞きくだされば、分りまする。イヤ私が申上げるのも異なものなれど親父奴は、老人ながら、抑も又貧窮の身の上。

バッサ　これ／＼誰ぞ一人にて話すが善い。一躰何の願であるぞ。

ランセ　旦那樣へ御奉口が致したいので。

ゴボ　たゞそれ丈の儀に過ぎませぬ。

バッサ　其方のことは兼ねて善う存じて居る。願の儀は聞き届けてつかはすぞ。實は今日其方の主人シャイロックと面談致したが、シャイロックも、呉れ／＼其方のことを推薦して居つた。尤もあのやうな金滿家の緣を離れて、拙者如き貧乏紳士の許に奉口するは、敢て出世とも申されまいが喃。

ランセ　これは御言葉とも覺えませぬ。古の諺にも、身に附いた寶が黄金にまさる寶なり、とありまするが、これは誠に自家の旦的と貴所樣とに、的切當嵌まつた名言と存じまする。貴所樣の有たるゝは心の寶、シャイロック旦的の有つて居るのはたゞの黄金。

バッサ　イヤ感心なことを言ひ居る。さア親人、悴を連れて行くが善い。して舊主人より暇を貰ひ受けた上にて、拙者の邸に尋ねてまゐるとせい。

〔從者に向ひ〕其方達は、この者の爲めに衣裝を誂へて遣はせ。同輩のよりも、立派に絓の紐を附けて、よく面倒を見てやるが善いぞ。

ランセ　親父どの、まア此方へ御座れ。ナントこれでも俺樣は祿離れの素餐者だらうナ。これでも辯口のきけぬ間拔者だらうナ。何うだ、感心か。時に（と己の掌を見ること）以太利廣しといへども、この俺さまのよりも結構な手相の人間が、又と居るだらうか。俺は非常な幸運を有つて生れて居る。賣卜者に言はせると、これがその、お粗末ながら長命の筋、又此方のは、こりや女房を澤山持つ筋……ナニ斯ンなものは取るには足らぬさ。十五度女房の變更をするなどは、へゝゝゝ情なくて泣きたいやうだ。たつた一人の男の身で、寡婦が十一人、處女が九人、併せて二十人悉く御手に懸けまくもあやに畏き次第也サ。それから水難を三度助つて、一方に肉薄團の上にて、女難の患があるなどは、此奴ア下さらない助かりやうだ。兎も角も、よく世間の人が言ふやうに、運の神樣が、實際女の神だとすりや、中々憎からぬ少女さネ。さア親父どの出掛けやう。これから早速押し懸けて行き、瞬する間に、旦的から暇を取つてお眼にかける。

とランセ、ゴボ兩人退場

バッサ　時にレオナルド、其方には大切の依賴がある。是等の品物を殘りなく買ひ入れ、それを悉皆船内に積み入れ、そして早速歸つてまゐるのぢや。今宵は親友を招ぎて酒宴を張るほどに、急いで行つてまゐれ。

レオ　承りまして厶りまする、成るべく迅う致してまゐりまする。

グラチアノ登場

グラ　御主人は何所に見えられるな。

レオ　それ其所に御徒歩になつて居られまする。

と退場

グラ　やァバッサニオさま！

バッサ　さう言はるゝはグラチアノ！

グラ　拙者はお願の儀があつてわざ／＼参上。

バッサ　何なりと聽いてやるぞえ。

グラ　不承知は言はせませぬぞ、拙者は是非ベルモントへ隨行致したき了簡。

バッサ　是非とあらば是非行くが善い。たゞグラチアノ、和主には注文があるぞい。和主は兎角行儀が惡るくて、言葉遣ひが粗略で亂暴過ぎる。是等はつまり和主の天眞が露はれし所で、よく平生の氣性に適ひ、日頃親しく往來する吾々にとりては、缺點とも何とも見えはせぬ。只他人の間に混つた折には、聊か我儘勝手の誹謗は免れまいか。因て先地へ行つて居る間は、少しは行儀作法といふ、窮屈な事も守り、和主の氣性の剽輕すぎる所を抑へて欲しい。さもないと、和主の亂暴な擧動から拙者までも誤解を招ぎて、散々の失敗を重ねぬとも限らぬ。

グラ　おッと其點に脫漏のある拙者ではムらぬ。御安心あれ、確かに生眞面目な態度をして、御丁寧な言葉をきいて、野卑た文句は大概除物、衣嚢の裡には祈禱書を入れて、さも謹直な顏容。食事の際に祈禱があら

ば、先づざッと斯ンな風に、帽子を脱いで眼の上に翳し、溜息をついて、アーメンと唸り、苟くも禮儀作法に關した事柄は一から十まで悉く守り、さも平生から御祖母さまの御機嫌取りの、堅苦しいお行儀に、慣れ切つて居ると、言はぬばかりの顔をして、御眼に懸けまする。若し首尾よくこれが出來なかつたなら、貴殿から生涯信用を失つても敢て苦しうはムらぬ。

バッサ 氣をつけて貴公の素振を拜見して居やう。

グラ は――イヤ併し今晩だけは例外でムるぞ。今晩の拙者の態度を以て、他を推察されてはやりきれませぬ。

バッサ イヤ今晩から氣取込まれては、それは拙者に於ても却つて迷惑、今晩は寧ろ思ひ切つて、羽目を外して、一番和主の陽氣な所を見せて貰はう。今晩の賓客は、飽まで皆大に浮かれやうと覺悟を決めて居る親友のみぢや。それはさうと、拙者はこれにて霎時分れる。いさゝか用事を抱へて居る程に。

グラ 拙者もロレンゾ其他に會はねばならぬ身。が、いづれ晩餐の時刻には一同揃つて參上致すでムらう。

と一同退場

第三場　同市　シャイロック住宅の一室

ヂェシカ（シャイロックの獨り娘）及びランセロット登場

ヂェシカ 斯うして其方に暇を取られると、妾ア心から殘り惜しいわいなア。地獄のやうな此家も、陽氣な其方が居たゆゑに、どの位退屈しのぎに

なつたか知れぬ。そンならこれて分れるぞえ。この一両の金子は僅少ながら取つておきや。シテ、ランセロツト、其方の今度の御主人様が、今宵催さるゝ宴會の席には、ロレンゾぬしが見えやうほどに、その折この書状を手渡してたも。人目に觸れてはならぬぞえ。さアこれておさらばぢや。其方を相手に、内證話をする現況を、父に認められては一大事。

ランセ　そンならお孃様、これがお訣別！　涙の雨に、拙者の舌の根は沈魚落雁。嗚呼異教徒乍らも稀れなる美人、猶太人とは言へど上品の素質！ハテ、こりや的切あの旦的の種ではないぞ。和女の母御がこつそり目褄を忍び夫かはす枕の重りて、それて製造へたのではあるまいか。イヤお孃様、そンなら御無事て。活智のない愚痴の雫に、何んだか元氣が沈み加減て耐りませぬ。御無事て……。

ヂエシ　其方も無事て。

とランセ退場

あゝ恥かしい妾の身の上、父の娘と呼ばるゝを、面目なく思ふとは、まア何といふ罰當りな！とは言ふものゝ親子の縁はたゞ血筋の上、性行の上の隔りは、東と西に離れ〴〵、父てなければ、娘てもない。依頼にするはロレンゾぬし、兼ねての誓詞をお忘れあるな。さすれば心の煩悶も、何時かは過去の夢と消え、宗旨も籍も甲斐〳〵しく、妾アお前の天下晴れての女房ぢやぞえ。

と退場

第四場　同市　街頭

グラチアノ、ロレンゾ、サラリノ、及びソラニオ登場

ロレンゾ　イヤ心配さるゝな。晩餐の折に潜かに座を外して拙者の宿に參り、假裝を施して戻つて參るまでに、一時間もあらば充分ぢや。（假裝狂言に（マスク）つきての下相談と知るべし。當時宴席などに流行せる也。）

グラ　と言つて格別の準備も致して居らぬのみか、

サラリ　肝腎の炬火夫の用意も致してない。

ソラニ　折角の趣向も、見事に行かぬは散々なもの、拙者も寧ろ中止の方に手を擧げる。

ロレンゾ　でも漸く四時になつたばかり、準備の時間がまだ二時間もある。

ランセロット一通の書狀を携へて登場

や、ランセロットの大將、何の御用ぢや〳〵。

ランセ　此書狀の封を切つて御覽になれば、事明細に分るてムらう。

ロレンゾ　その手ならば聞かずと分つて居る。イヤ全く奇麗な手、書く紙よりも遙かに白き玉の御手。

グラ　情人からの附文ぢやナ、それは！

ランセ　拙者はこれにてお暇を戴きたうムりまするが。

ロレンゾ　これより何れへ參るのぢや。

ランセ　實はこれより、舊の旦的を訪問れ、今度の御主人樣が催さるゝ、今夜の宴會に招んでまゐる所。

ロレンゾ　ちよとこれを持つて行け。（と金子を與ふること）してヂェシカに逢つて、委細かしこまつたと傳へて呉れい。たゞし内密に申すのぢやよ。

とランセ退場

サラリ　さア〳〵方々、今夜の假裝狂言の準備に取懸らうではないか。炬火夫は拙者の手にて整つた。

ソラニ　よし〳〵承つた。これより早速出懸けてまゐらう。

ロレン　拙者も左樣致さう。

サラリ　然らば凡そ一時間を期して、グラチアノの宅に參集されい。拙者も同所に待つて居る筈。

グラ　委細承知、それが善からう。

とサラリ、ソラニ兩人退場

ロレン　時にその書狀は、それはヂェシカ孃から參つたものと見受けるが。

グラ　和主には是非逐一白狀致しておかねばなるまい。これは全くヂェシカからの艶書、中には拙者との驅落の手筈萬端をはじめとし、既に搔き纒めし金銀珠玉、又用意せる少年の服裝のことなど、細々と認めてある。あゝあの鬼見たやうな父にして、若しも行々地獄にも墜ちずに濟むなら、それは確かにこの優さしい娘御のお蔭。若し又この天女の身に、不幸の雲の纒ふとせば、それはかゝる猶太人などを父とせる、身の因果と諦めるより外はない。さア〳〵行かう。書狀は歩みながら讀むが善い。今夜の炬火夫の役は、可愛いヂェシカがつとめる筈。

と兩人退場

第五場　同市　シャイロック住宅前

シャイロック及びランセロット登場

シャイ　イヤ盲目でなければ、此シャイロックとバッサニオとの差異位は分ろ

筈、よく眼を明いて見るが善い。――コーラ、チェシカ！（と大聲に呼ぶ）――呉れ〴〵も汝に言ひきかせて置くが、俺を食ひ倒したやうに、以後は大食をせぬが善いぞ。――コーラ、チェシカ！――それから、今迄のやうに朝寢坊をして高鼾をかいて、そして四季施をビリ〴〵に引き斷つては濟むまいぞ。――ヤイ、チェシカ、チェシカと申すに！

ランセ　ヤイ、チェシカと申すに！

シャイ　エヽ八釜しいわい。誰が汝に呼べと吩咐けた。何時吩咐けた覺があるかよ。

ランセ　でも吩咐けなければ何もせぬ無精者だと、旦那は所中叱言ばかり言つて居たくせに。

ヂェシカ登場

ヂェシ　お召喚になつて？何の御用でムンすぞえ。

シャイ　俺は喃、チェシカ、宴會の席に招ばれて、これから出掛けるのぢや。鍵はソレ其所に置いてあるぞ。が、何うも氣がすゝまぬな。格別好意づくで、此招待を寄越したのぢやなし、ホンの外面ばかりの御世辭に過ぎない。と言つて、行かぬのも業腹、俺の方でも惡意づくで行くとせうわい。行つて、あの道樂者の料理でも食ひ散してやらうわい。善いか、娘、よく自家の監視をして居れよ。俺は行くのは誠に厭でならぬ。昨夜金の財布を夢に見たが、こりや何ぞ、目出度くない事が、起りかけて居る證據ぢや。

ランセ　イヤ旦那、其樣ナ事を言はずと、後生だから行つてください。主人も折角旦那の御奮發をお待ち兼ねの躰。

シャイ　俺は又汝の主人の御憤激を待つて居る。

ランセ　所て、今夜は、皆さまの間に、種々御趣工の餘興もムります。と申して敢て旦那に、狂言の御見物を、無理に御勸誘は致しませぬが、若しひよッとして、それを旦那が御覽とあらば、今更思ひ當る不思議の節々。忘れもせぬ、去ぬる復活祭の月曜日、午前六時と申すころ、拙者の鼻孔から流れ出でたる鼻血のくれなゐ。さても、さッても、その年の聖灰祭に、たッたたま〳〵、午後の四年目。……。（鼻血の出るは、當時不吉の兆と思惟せられたり、ランセロットは態と恍けし文句を以て、シャイロックの身に不幸の來襲すべきを暗示せる也）

シャイ　何に！今夜狂言の催しがある？これ〳〵ヂェシカ、嚴重に戸締をせえ。そしてあの騒々しい大皷の音や、捩れ首の横笛の聲が聞え出したなら、夢にも窓へ登つてはならぬ。又首を往來に突き出して、粉黛立てた浮れ男子に秋波などを與れてはならぬぞ。よく家の耳に蓋を致せ。ハテ窓を締めろといふことよ。此物堅い家の内部を、惡るふざけの聲で汚されてたまるものか。あゝ宴會などに招ばれたうも何ともない。が、行くとせう。ランセロット、汝は一と足先きへ行つて、あとから俺が行くと傳へてやれ。

ランセ　然らばお先きへ御免――モシ〳〵お孃樣、何の御遠慮に及ぶものか。窓へ近寄つて御覽遊ばせ。

　いとしい殿御がツイ通るはず、
　一と目見たとて御損にやならぬ。

と退場

シャイ　あの下司の白痴が、今何と言ひおつた。

ヴェシ　ナニ「お嬢さまおさらば」と申したまで、他に何とも申しはせぬわいなア。

シャイ　イヤあの下郎、根性はさして惡るくもないが、たゞ何うもえらい大食家ぢや。主用にかけては蝸牛そッち退けの大鈍物、晝中にも散々眠つて、野良猫も跣足で逃げ出す有樣ぢや。元來用事の多い此家、とても彼樣ナ素餐者は畜つておけぬ。因て今回解備した譯であるが、それをわざと、あのバッサニオに向けてつかはした。詰まり、これは、借金で膨れたあの男の財布を輕くしてくれやうといふ苦肉の妙計――何はしかれヂェシカ、其方は内に入つて居れよ。多分俺は直に戻る。吩咐けた事は忘れるな。入つた後はよく締めておけ。油斷大敵、用心が肝腎とはよく言つたもの、精勤者には、毎々耳新らしく聞ゆる諺ぢや。

と退場

ヴェシ　早うお歸宅なされませ――さて、これから手筈の上に齟齬がなくば、今が親子の生別、娘は父、父は娘を失ふ譯。

と退場

第六場　同前

グラチアノ及びサラリノ登場、兩人假裝。

グラ　ロレンソが吾々に待合はせよと申したは此廂下。

サラ　最うかれこれ約束の時刻が過ぎて居るが。

グラ　げに不思議、あの男が約束の時刻に遲るゝ理由が分らぬ。色男といふものは、必らず時計の先き廻りを致すものぢや。

サラリ　ホンに御說の通り、鳩車驅る戀の女神も、男女の間に、新たに赤繩を結ぶとあれば、その時の車の迅さは又格別、氣ののらぬ、古い夫婦仲の融解に行く時よりは、十倍も迅いとやら。（戀の女神ヴェナスはキユピドと共に鳩にひかせたる車に乘る）

グラ　イヤ何事も皆さうぢや。食卓を離るゝ時には、誰しも初めて席に着ける時ほどの食慾はない。又いかに練れたる曲馬も、二度目からの藝盡しには、初めの元氣は失せる道理。ありとあらゆる天下の事物は、それを手に入れる迄が最も愉快、濟んだ上は皆氣が拔殼。善い例は船舶にもある。滿船飾旗を飜して、故郷の港灣から纜を解く時は、年齒尙ほ若い蕩樂息子が、綺羅を飾つた體たらく。吹く風さへも嫋々として、春を賣る手弱女が、袖にまつはる如くなりぢや。然るにそれが歸港の樣

を眺むれば、浮世の海にもまれ〳〵て、見る影もない零落れ樣、船躰は雨雪に蝕まれ、白帆の類は寸斷〳〵に裂け、淫婦の本性さらけ出せる無情の風の嬲りもの、前後正躰なさけない姿となつて居る。

ロレンゾ登場

サラリ　ヤ、いよ〳〵ロレンゾの御入來、和主の說法は、何れ後刻。

ロレンゾ　何れもかく遲刻致したる罪は、平に御容赦。これは差迫つた用事の譴、拙者の所爲ではムらぬ。イヤ卿達が、行く〳〵女房の件にて、忍びの術を行ふ場合もあらば、その時は今日の御恩返しに、拙者が存分待つてあげる。――依もう、誰ぞ居られませぬか。

ヂエシカ登場、階上、少年の服裝

ヂエシ　さう言はるゝは何誰て？　念の爲め、名告つて戴きまする。とは言ふ

もの、何うやら心當りのある御聲。

ロレン　ロレンゾぢや。君の爲めにはうれしい人。

ヂエシ　ホンにロレンゾさま、ホンにうれしい御方――これほどうれしい御方が、何れにムンせうぞえ又此戀仲の秘密を知るは、廣い世界にお主が一人。

ロレン　アイヤ知つて居る者が、まだ二人ある。一人は神樣、一人は和女……。

ヂエシ　ちよと此の筐を受取つてたも。受取つて御損にはならぬぞえ。さるにても、これか晝間でなくて何より僥倖、小姓姿の此變姿が貴郎の御目に留まらずに濟むわいな。尤も戀は闇、耻辱外聞も眼には映らぬものとやら。さもない日には、何でこの姿が人目に懸けられませうぞえ。

ロレン　早く降りてたも。今夜の炬火夫は是非和女に依まねばならぬ。

ヂエシ　エヽ身の耻辱をさらす爲めの燈火をわが手に持てと言はるゝか。光がなくも氣がひけて、穴にも入りたい妾の身。それに炬火夫とは露顯の役目、隱れ得る丈隱れる筈の、妾には似合はぬことぢやわいな。

ロレン　ナニ少年の假裝をした丈にて大丈夫、少しも目立つことてはない。兎に角早く降りてくれよ。さういふ中にも、夜の黒幕は剝げて行く。又バッサニオの宴席にても、吾々の來着を待つて居る。

ヂエシ　そンなら急いで戸締して、路用の銀子を今少し身に着け、すぐにお側に行くわいな。

と階上より退場

グラ　イヤ何う見ても高尙優美の手弱女、柔順にして猶太人にあらずか。

ロレン　心から彼娘を愛することの出來ぬとあつては、このロレンゾは男

子てない。胸のかゝみにかけて見れば、ヂェシカは賢女、眼てながむれば正しく美女、擧動から考ふれば確かに貞女。かく賢女、美女、貞女と、三拍子揃つた上は、是非とも末長う、わが偕老同穴の侶とせねばならぬ。

ヂェシカ登場階下

おゝヂェシカよく來てくれた。さア何れも早速出掛けるとせう。狂言の連中がさぞ待ち兼ねて居るてあらう。

とヂェシカ、サラリノ兩人を連れて退場

アントニオ登場

アントニオ　其所にあるは何誰てあるな。

グラ　やァアントニオ樣！

アントニオ　チッグラチアノか、何して居るぞ。他の方々は何所へ參つた。最うかれこれ九時、皆卿達を待つて居る。今夜は狂言は中止ぢや。風位が吹き直つたのてバッサニオは最う追ッ付け乘船。拙者は、二十人も人を走らせて卿の行方を捜索して居た所ぢや。

グラ　おッと贊成、今夜中に出帆とは、こりや何よりの吉報。

と兩人退場

第七場　ベルモント　ポルシア邸の一室

コルチットの囃子　ポルシア及びモロッコ公子、其他双方の隨員登場

ポル　さア帳をのけて貴賓さまに、のこらず手筥を、お覽せ申せ。——いざお選みのほどを。

モロ　どりや〳〵。第一は黃金の手筥か。これがその文句ぢやな。——

「われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。」

第二は銀の手筥、その題辭は何とある。——

「われを選ばむものは、其人にふさはしき丈を獲む。」

第三は寢惚色の鉛の手筥、文句までが又無骨に出來て居るナ。——

「われを選ばむものは、持てるすべてをさゝげ、すべてを賭せよ。」

ハアテ何と致して、當籤が抽けるてあらう。

ポル　三個ある中の一個の手筥に妾の背像が入れてムりまする。それをお選みの上は、不束な妾の身は、和郎さまの御許に嫁りますぞえ。

モロ　かゝる時にはたゞ神依み、よい分別を授けて欲しいものぢや。どりや今一應、篤と文句を味うて呉れう。この鉛の筺には何とあつたナ。—

「われを選ばむものは、持てるすべてをさゝげ、すべてを賭せよ。」

フムすべてを捧げるもよいが、何が爲めに捧げるのぢや。鉛の爲めか。鉛の爲めに賭するのか。この手筥は人を脅迫する。苟くもすべてを賭するとあらば、誰とて希望の光明を前途に望むからぢや。千金の子は、襤褸鐵屑の類に腰はかゞめぬ。鉛の爲めにすべてをさゝげ、すべてを賭するは身ども眞平ぢや。然らば此無垢純白の銀製の手筥には何とあるな。——

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む」

フム正に其人にふさはしき丈とあるナ。こりやモロッコどの、素通りは出來ぬぞ。公平に御自分の眞價を量つて見い。御自分一個の鑑定によれば、勿論その資格は充分ぢや。が、待てよ。その充分といふ中には、或はポルシア姫までは含まれて居ぬかも知れぬ。と言つて、われと吾が資

格を疑ふは、甚だしい不見識。フム身どもにふさはしき丈！こりや的切姫ぢや。姫のことぢや。門地の上から觀ても、身どもに資格のあるは言ふまでもない儀、又財產といひ、人品といひ、遊藝の素養といひ、何につけても不足はない。就中このこがるゝ情思が、婿の資格の中の第一、こりや最う道草を食はずに、これを選ぶとせうか。イヤ待て！今一應黃金の筐の文句を讀んで吳れう。……

「われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。」

ハテこれが姫のことぢやな。姫を手に入れたいとは世界中の希望、地球の隅々隈々から、人界に御姿をあらはし玉へる、この天津乙女を拜みに集まる男子は無數、ヒルカニアの大沙漠でも、際涯なき亞剌比亞の荒野でも、今はポルシア姫に逢ひたい、見たいの王子公孫の通ひ路。

狂瀾怒濤天を拍つ青海原も、外國の殿原を引きとゞめん關とはならずして、恰かも小溝でも飛び越すやうに、それを乘り切つて拜みにまゐる。幷べた筐はすべて三種類、その中の一個に、姫の御肖像が入れてある。所で、鉛の筐などに果して之が入れてあらうか。イヤ〳〵勿躰ない。斯んな事は夢に見ても罰が當らう。鉛などは、墓場の底に葬るべき棺桶の用にも不足ぢや。然らば銀の手筐に雲隱れして居られるかな。と言つて銀は黃金に比べて、十倍も廉い所を見れば、これも矢張り勿躰ない譯。これほど貴重の寶物が、古來黃金以下の物に包まれて居た例はない。現に天使の姿を刻める金貨が英國に在る。たゞしそれは表面に附着し、この天使は又黃金の床にすや〳〵と御安眠。さア鍵を渡して貰ひませう。身どもは之を選定した。當るか、當らぬか、それは固よ

り運次第！

ポル　さらばお渡し申しますぞえ。して若しも妾の肖像が、その内にあり
ましたなら、その時は妾は言ふまでもなく和郎さまの所有。

（と モロッコ 公子黄金の手筥を開く）

モロ　やァ南無三寶！何物ぢや、これは！たゞ見る一個の髑髏、その物も
無き眼窩の中には一片の巻紙が入れてあるぞ。どりや其文句を讀んで
つかはさう。

光るものとて黄金ぢやないとは。
古るい諺たれも知る筈。
表面の色にたゞ欺されて
命まで賣る世のおろかもの。

金色の墓中に蟲あり。
年歯がわかくて思慮が深く、
きついが能の和主でなけりや、
愛憎づかしは言ふまいものを。
ヤ一昨日とは飛んだ御苦勞、
花にや縁ない冬枯のそら。

ポルシア姫、これてお暇申す。胸の裡がくさ〳〵して、長文句の告別な
どは口に出ぬ世の失意の士の去る時は皆斯くの如しぢや。

（と扈從を率ゐて退場、コルチツトの囃子）

ポル　お手柔かな厄拂ひ、これにて一と先づ安心。さァ早う帳をかけるが

よい。黒ン坊の殿方は、皆この流儀で首尾よく籤に外れて惜しいものぢや。

と一仝退場

第八場　ヴェニス市　街頭

サラリノ及びソラニオ登場

サラリ　あれさ、拙者はバッサニオが出帆する所を目撃して來たのぢや同行者中にはグラチアノが見えたが、確かにロレンゾは居なかつた。

ソラニ　忌々しいのは、あの猶太人の惡黨、八ケ釜しく言うて君公さまを驚かし奉り、とう〳〵連立つて、バッサニオの乘船の撿査に參つた。

サラリ　所が、それが時期に後れ、船は正に帆をあげて出やうとする間際であつた。然るにたま〳〵ロレンゾ、チェシカ兩人が、手に手を取つて小艇の中に居る所を、見たものがあるとの報知が、この時君公さまの許に屆いた。其上アントニオが又、決して兩人が、船中に居ぬ由を、君公さまに確證した。

ソラニ　イヤ觀ものぢやッたのは、あの時のシャイロックの怒號具合さ。あの猶太人の畜生が、街々で吐しおつたやうな、彼樣ナ無茶ナ、彼樣ナ、奇天烈ナ、彼樣ナ、不埒ナ、そして彼樣ナ八釜無性ナ怒號方は、臍の緒切つてから初めてぢや。先ア斯うさ。――「ウァー大事の〳〵娘！ウァー大事の〳〵貨幣！ウァー大事の娘！大事の娘が耶蘇の男子と驅落をした！ウァー耶蘇の貨幣が見えなくなつた！裁判は何うして呉れるッ！法律は默つて見て居るかッ！大事の貨幣と大事の娘を何うす

る氣だッ！封印附の財布……封印附の、大判小判の入つた財布が二個までも、娘に掠はれたンだ！お負けに寶石だ、寶石が二タ粒、無類飛切りの、大事の〳〵寶石が二タ粒とも、之も娘に掠はれたンだ！ヤイ裁判は何うして呉れるッ！娘を見つけて寄越さぬかッ！娘が寶石を持つて逃げた。それから又貨幣を持つて……」

サラリ　イヤ、ヴェニス市中の小供等が面白半分その後に附隨て、迷子の〳〵寶石ヤイ、娘ヤイ、貨幣ヤイ、などゝ騒ぎ居つた。

ソラニ　こりや、アントニオは折角用心して、約束の日限に後れぬやうにせにやならぬ。さもないと、之が爲めに辛い目に逢はされるぞ。

サラリ　ホンに尊公善い所へお氣がつかれたな。實は拙者昨日、さる佛人と談話を交へた。すると、その人の言葉に、佛英兩國を區分する、例の英國

海峡にて、貨物を滿載したる、以太利の船舶が一隻、難破したと申す話。之をきくと同時に、はッと拙者はアントニオの事に想ひ及ぼし、その難破船が同氏の所有船でなければ善いがと、心私かに祈つたやうな次第。

ソラニ　こりや、アントニオに、右の次第を報知せるが善からうぞ。最も唐突には言はぬが善い。さもなければ、何の位心配するか知れぬ。

サラリ　イヤ世界廣しといへども、あれ位親切な御方は二人とはあるまい。この間も拙者は、バッサニオとの訣別の摸樣を傍で見て居ました。やがてバッサニオが、成るべく早く戻るとは言ひまするど、アントニオは優さしくもそれを押しとどめ、「イヤそれには及ばぬ。拙者故に大切の仕事に疵をつけられるナ。機の熟するまで何時までにても滞留するが

善い。拙者がシャイロックに差入れたる證文の事を憂るなどは、それは戀する身には入らざる苦勞。まづ〳〵陽氣に、全く他事を放擲し、戀の懸引、色の口說に腦漿を絞り、先方の歡心を得るやうに苦心するが善い。――かく言ひながらも兩眼には雫が一杯、顏を背反けて、後ざまに手をさしのべ、優さしいとも床しいとも、何とも言ひやうの無い心地で、バッサニオの手を取つて、しみ〳〵と握手した。さて、それから、二人は漸く右と左に袂を分つたやうな譯。

ソラニ　イヤあの方は、バッサニオのあるばかりに、浮世が面白いと思つて居られる樣子ぢや。さアこれから連れ立ちて、アントニオを搜し出し、何ぞ愉快な談話でもして、例の沈鬱症を逐ひ散して呉れやうではムらぬか。

サラリ　おゝそれが善からう。

と退場

第九場　ベルモント　ポルシア邸の一室

子リサ下男と共に登場

子リ　さ大急ぎ〳〵！急いで帳を除けてたも。アラゴン公子には既に寺院に於て誓詞を立てられ、追ッ付け抽籤にまゐられる筈。

コルチットの囃子　アラゴン公子、ポルシア、及び双方の隨員登場

ポル　いざ御覽遊ばしませ。手筥は何れも其所にムりまする。シテ若しも貴所さまのお選みなされし手筥の內部に、妾の肖像がある上は、これより直に婚禮の儀式を擧げまする筈。若し又それが外れましたら、貴

所さまには兎角のことを仰せられず、即刻當地を御出立になるのでムりまするぞえ。

アラゴン　余は先刻、既に三個の條件を守るべく、誓を立てました。第一は、余が選べる筥の何れなるかを、何人にも口外致さぬこと。第二は、若し余にして、正しき筥を選擇し得ざるに於ては、余が一生の間、婦女に對つて決して結婚を申込まざること。又最後の件は、若し余にして運拙く、事失敗に終らば、即刻當地を後にすることでムる。

ポル　かく誓詞を立てらるゝは貴所さまのみにはムりませぬ。不束なる妾故に、抽籤に加入されし方々は、何れも右の規約に遵はれまする。

アラ　拙者に於ても、兼ねて充分其覺悟は致してまゐつた。願くは運强く、まんまと日頃の希望を達したいものぢや。さて打見る所三種の筥、金と銀と、それから下等な鉛の筥とがあるな。——

「われを選ばむものは、持てるすべてを捧げ、すべてを賭せよ。」

こりや、この鉛は不屆な事を申す。すべてをさゝげ、すべてを賭する前には、今少し立派な外觀を要する。黄金の筥には何とあるな。

「われを選ばむものは、多くの人が望むものを獲む。」

多くの人の望むもの——ハテ此多くの人と申すのは、性來愚鈍にして單に外見に因りて選擇を行ひ、徒らに朦朧たる眼力のみを依賴と致す所の多數人士を意味するのぢや。かゝる奴輩にかぎり、眼光は常に裏面に達せず、かの愚かなる燕の一種と同じく、屋外の壁上、掩蔽物も何もなき、危險の場所に、巢を搆ふるの類ぢや。余はゆめ／＼是等多くの人の、所謂望む所を選ぶまい。普通の末輩と伍を同うし、野蠻の群

民と席を共にするは、余に於て屑からざる次第ぢやからな。さう致すと、自から足下ぢや、喃、銀の玉手箱の君。どりや今一應、足下の帶びたる題字を拜見致さう――

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

こりや、文句までも名言ぢや。げに一點の長所をも具へざる身を以て、徒らに高名富貴を僥倖して可ならむやぢや。何人に限ず、己に不相當なる威儀態度を、帶びんなどゝは不屆の所爲。是非世の中は、儀裝、稱號、官爵の類、皆之を得るに道あり、純白の高名、獨り眞正の價値によりて獲得されたいものぢや。然るに伸ぶべくして却て屈し、頤使さるべきに、却て指揮の大任を汚す例は極めて多い。かの花も實もある秀才の間より、拔きて棄つべき凡庸の才はいかに多からう。之と同じく紛々擾々たる時俗の塵芥裡より、選み出すべき寧馨兒の數も亦いかに多かるべき。イヤ餘事はさておきて、早速選擇に取りかゝらねばならぬ。

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

拙者は充分の資格があると自から信ずる。いで此筥の鍵をば手渡されよ。一身の吉左右、直に蓋を除いて査べて見やう。

と公子自から銀の手筥を開く。

ポル　ホヽ左樣のものを開けるのに、えらいお手間の取りやう。

アラ　ヤこりや何物、薄目を致せる白痴の肖像が、余に向ひて、一個の卷物を捧げて居るわい！何りや讀んで遣はさう。さるにても、汝の顔は、餘りと言へば、ポルシアに似ぬ。餘りといへば余の希望、余の人品に相應致さぬ。

「われを選ばむものは、その人にふさはしき丈を獲む。」

エヽ余は白痴の頭を貰ふだけの人物か。これが余の獲物か。余の價値はたゞこれしきのものに過ぎぬか。

ポル　これいなア籤はたゞ物の判別をつけるもの、決して人を辱める爲めの物ではムりませぬ。間違うてくださるな。

アラ　ハテ何と書いてあるな、――

筐の銀七度鍛へ、
智慧のかゞみは七度試し、
それでくもりがツイ現はれぬ。
阿呆らしいのは影追ふ人よ、
手に入るものはたゞ影ばかり。

世間よく見る銀鍍の愚物、
筐の内のもまた其種類。
妻は和主が獨りでさがせ、
白痴の頭は和主にあげる。
さらば立ち去れ、いざとく／＼と。
斯んな所に居れば居るほど、
器量はます／＼さがるばッかり。
白痴面さげて來たそれがしが、
白痴を土産に貰ふてかへる。
いざさらば君誓詞の通り、
蟲をおさへておッと辛抱。

とアラゴン及び其扈從退場

ポル　飛んで火に入る夏蛾の、もろく斃るゝ姿も斯くや――ても御念の入つた白痴どのゝ多い世の中、いろ〳〵絞る猿智慧も、たゞ失策を招ぐ種。

チリ　古い諺に「首切らるゝも、妻を貰ふも、皆これ前世の宿縁」と申しなするが、今更思ひ當りまするわいなァ。

ポル　チリサ、早うその帳をかけや。

下男の一人登場

下男　御姫さまは何れにお在なされまする。

ポル　爰に居るぞえ何の御用か、早速仰せの程を承りたうムりまする。（とわざと丁寧に言ふ）

下男　只ッた今、御門の邊に下馬したるは、年齒倚ほ若きヴェニス人、その御主人の來訪を、前觸の爲め、參上致しましたる御使者にムりまする。シテ主人の吩咐ぢやと申して、花も實もある御挨拶――と申した丈にてはお分りになりますまい。早く言へば、御丁寧なる口上の外に、貴重のお土産を頂戴ナ致したのでムりまする。今迄下郎奴は、これほど適任の戀の御使を拜見したためしがムりませぬ。春去りくれば、花の風、衣を吹いてなめらかに、梢にかゝる白雲の、夏の近きを觸れて行く。イヤこれにもまして、なづかしいのは、尋ね來る殿の近きを觸れにまゐつた、今度のお使者にムりまする。

ポル　煩いわいな。最う〳〵廢してたも。言はせておけば圖にのりて、「實はその使者とは親戚の間柄」などゝ、今に申すやも知れぬ。修飾澤山の外

出言葉で、さう讃められて耐るものぞいなさ。チリサおじや。左樣に鄭重な戀の御使とは、いかなるものか、早く行つて見やうぞい。

チリ　これが、バッサニオ樣であつてくだされればよいが。

と一同退場

第三幕

第一場　ヴェニス市　街頭

ソラニオ及びサラリノ登場

ソラニオ　時に市場の邊には何んな風評がムるナ。

サラリノ　イヤ不相變よく耳に入るは、アントニオの船が、高價の船貨を滿載したまゝ、英吉利海峽で難破したといふ風評で、たしか其邊はグドウィンスとやら言ひますかいナ。一躰に危險千萬な砂洲の名所、これまで難破した船舶の死骸が、かずく埋もれて居ると聽きまするな。尤もこれはたゞ世間の風評、聞風捉影的空談に過ぎぬかも知れませぬ。

ソラニ　イヤ世の風説には中々油斷はなりませぬ。現にこれで三度目の亭

主に死なれた浮氣の寡婦が、蠶を噛んでボロ〳〵涙を流して見せ、さも實意があると近所の人を擔ぎにかゝるなども見受ける世の中、右の風說子も何卒この種類のものであつて欲しいものぢや。それはさておき、談話に際しては道草は禁物、始まつた物語は腰を折らぬことゝ致して、手短かに申上げるが、實際わが親切にして且つ又律義なるアントニオ氏におかれては――イヤ親切というても、律義と申してもまだ言ひ足らぬ。實に拙者は同氏に適用すべき言句を見出し難きに苦む次第で……。

サラリ　これ〳〵善い加減に文句を端折らぬか。

ソラニ　何……何んぢやと？　ハテサ文句の結末は、アントニオ氏が、所有の船を一隻失つたと申す事。

サラリ　兎に角これを難船の最後にしてほしいものぢや。

ソラニ　オット今の中に惡魔除けのアーメンの一ッも言うて置かう。ソレ彼所に惡魔がやつて參つた、――惡魔の片割シャイロックが。

シャイロック登場

や、シャイロック殿お珍らしい。何ぞ商人仲間に耳新らしい奇談でもありませぬかな。

シャイ　これ〳〵和主は百も二百も承知の筈ぢや、自家の娘が驅落したことを――イヤ和主ほど詳しい話を知つて居るものはない筈。

サラリ　それは全くその通り。何を隱さう、拙者に於ては、貴殿の娘御が高飛する爲めの羽翼を造つた、その裁縫師と別懇の間柄。

ソラニ　イヤ此籠の鳥が、モー毛並揃はぬ雛鳥でない位は、シャイロックどの

に於ても、既に充分御承知の筈ぢや。シテ一躰鳥と申すものは、羽毛が揃へば、皆母鳥の側から逃げ出すものと相場が決つて居る。

シャイ　眞に憎い雌鳥でムる。何れ地獄にでも墜ちる奴。

サラリ　イヤ惡魔どの丶裁判では、こりや地獄に墜される筈ぢや。

シャイ　肉を分け、血を分けた女の身で、わが言ふことをきかぬ不埒者！

サラリ　これ〳〵耄碌奴ッ！よい年齢をして、まだ女子に氣があるのか。

シャイ　イヤ娘は肉を分け血を分けた間柄ぢやといふのぢや。

サラリ　和主の肉と娘御の肉とは、そりや全然別物ぢや。黒玉と象牙玉との差別がある。又血とても同樣、その差異は、赤葡萄酒と白葡萄酒との差異よりも甚だしい。それはさておき、アントニオ氏が海上で損耗をしたとか、せぬとかいふ風說は、まだ和主の耳には入らぬか。

シャイ　イヤ拙者は爰で又飛んだ拙い取引をしました。彼奴は最う破産者、お負けに道樂者、碌々市場などに首は出せませぬ。が、彼樣ナ乞食の癖にあれでも元は扮飾込んで市場へ出入したものぢや。兎に角證文の一件を忘れぬが善い。平生俺を高利貸などゝ散々惡言をついて居た。兎に角證文の一件を忘れぬが善い。彼奴これまで酔興にも無利息で金子を貸して居た。兎に角證文の一件を忘れぬが善い。

サラリ　これ〳〵、よもや和主は期限に後れたからとて、アントニオの軀の肉を截り取る氣ではあるまいナ。人間の肉を取つて何の役に立つ。

シャイ　魚の餌にでもしてくれる。イヤ格別食料にはならぬにしても、この日頃積り積れる復讎心には、あれに越した御馳走はムらぬ。彼奴拙者に侮辱を與へ、拙者に五六十萬両の損耗をさせた。拙者が損をすれば

笑ひ、拙者が利益を獲れば嘲り、拙者の同胞を輕侮し、拙者の取引を妨害し、拙者の朋友を疎外し、拙者の怨敵を唆かした。して其理由は何？單に拙者が猶太人であると言ふ迄に過ぎぬ。猶太人に眼がないか。猶太人に手がないか。其他耳目口鼻、身體髮膚、四肢百骸、喜怒哀樂の情念がないか。吾等とて同一人間、同一の食物を食み、同一の武器を以て傷けられ、同一の疾病に罹り、同一の醫藥を以て治療され、同一の冬と夏とに由りて、或は溫められ、或は冷さるゝ事、耶蘇教徒と何の差がある。吾等とても錐もて刺さるれば同じく血は流れる。指もて擽らるれば同じく笑ひ出す。毒を飲まさるれば同じく斃れる。之と同じく侮辱を受けて復讐をせずに置かうか。他の凡ての點が卿達と違はぬ以上は復讐の點に於ても卿達に類似するに何の無理がある。今若し吾々猶太人が耶蘇教徒の一人を侮辱せば、その耶蘇教徒は何を致す。無論復讐ぢや。さらば若し、耶蘇教徒が吾々猶太人を侮辱する上は、右の模範が模範、無論復讐に決つて居る。拙者は卿達が教へてくれし魔道をば飽まで實行致す決心ぢや。イヤ模範以上に立派に改良してお目にかける。

下男の一人登場

下男　旦那樣方は其所に御在になりましたか――主人アントニオには只今在宅、貴所方御兩所に、用談の件があるとの儀に厶ります。

サラリ　おゝ拙者どもゝ、實は彼方此方御主人の行衛を搜して居た所。

チユバル（猶太人にしてシャイロックの腹心）登場

ソラニ　オヤ〳〵猶太の眷族が又一人殖えた。こりや耐らぬ。惡魔でも煩は

さなければ、とても彼奴どもの敵手にはなり兼ねる。

とソラニオ、サラリノ及ビ下男退場

シャイ　おうチュバル無事であつたか。ジェノアから、いかなる消息を齎してまゐつた。娘の所在は見附けて呉れたか。

チュバ　はアお嬢樣の風評のする場所へは屢々參りましたが、その所在はツイ突き留め兼ねました。

シャイ　こ……これで、彌々依みの綱は斷れ果てた！到頭あの金剛石が——あのフランクフォルトの町で、大枚二千兩を擲つた品物が水泡になつた。あゝ斯ンな災厄はまだ吾々同胞の上にも落ちかゝつた例はない。斯ンな災厄は身に受けた例もない。あの一品で二千兩。その外眼球の飛び出るほど、價の高い寶石が幾個も失せた。嗟、娘が縱令脚下で死なうとて、身に寶石類さへ附けて居て呉れゝばまだ斷念の法もある。又脚下で柩車に收められやうとて、その棺桶の内に貨幣さへ入れてあらば、まだ餘程嬉れしい筈。フム出奔した二人の行衛は皆暮知れぬのぢやな。これは先づ致方が無いとして、行衛捜索の費用が幾何ほどの大金に嵩んだらう。チュバル汝は忌々しい奴ぢや。損の上塗をしおる。逃げた盜人の攫つた金額がしか〳〵、その盜人捜索に使用つた金額がしか〳〵、その癖無念も晴れねば、復讐もとれず、不幸といふ不幸が皆この双肩に懸るばかり。吐く溜息に絕間なく、流るゝ涙に留所なく、あゝ何といふ因果な身の上ぢやらう。

チュバ　何んの、旦那樣、他人の身にも隨分不運なことは御座りまする。ジェノアにて承る所によれば、あのアントニオが……。

シャイ　何……：何んぢや？不運な事ぢや？不運？

チュバ　船を一隻難破れたと言ひますナ、トリポリスからの廻航中に。

シャイ　ヤーレ、ヤレ難有し辱なし。して、それは事實か。確かに間違はないか。

チュバ　拙者はその難破船から命拾ひをした水夫の二三と、現に言葉を交へて來ました。

シャイ　御手柄〱、チュバル大きに御苦勞ぢやつた喃。誠にこれは耳寄りの吉報ぢや。何よりの御慶事ぢや。アハヽヽ、何所でそれを聞き込んだ？ジェノア？

チュバ　さアそのジェノアでムります。御孃樣は、ジェノアの町で一夜に八十兩の大金を撒いたと申すことでムります。（とわざとあらぬ事を答へる）

シャイ　ウームその一言腸が寸斷れるぞえ。金子を取り戻すのぞみの綱は

これて彌々斷れた。たッた一度にチョロリ八十兩！物の八十兩！

チュバ　それから歸途には、アントニオの債主連とヴェニスまで同道しましたが、何れもアントニオは、破産の外に道はないと申して居りました。

シャイ　そりや何より善い事を聽いた。これから彌々彼奴を惱めて呉れる。散々折檻てくれる。そりや何より善い事を聽いた。

チュバ　所で同伴者の一人が、拙者に一個の指輪を見せましたが、その指輪こそ、猿一疋を以て、御孃樣と交換したものぢやさうで。

シャイ　エヽあの親不孝奴ッ！何うして呉れう。イヤ併しチュバル、汝は俺を散々酷い目に逢はせる喃。其指輪といふのは、土耳其玉箝入の品。（一種の寶石にして、往時は其色を見て吉凶をト知すべしとせり）未だ俺が獨身で居た折に、亡妻よりの贈物であつた。これが何て猿の一疋や二疋と換へてなるものか。亞弗利加

中の猿全躰とも交換されぬ。

チユバ　でもアントニオの破産は、あれは事實てムる。

シャイ　それは全くその通りぢや。それにいさゝかも相違はない。チユバル汝は早く執達吏を依んで呉れ。二週間以前より約束して置いて呉れう。シテ若しもアントニオ奴が、期限に後るゝが最後彼奴の心臟を抉つて呉れる。彼奴がヴェニス市から失せさへせば、それて初めて天下太平、思ひ存分大手を振つて商法が出來るといふものさ。アチユバル急いて參れ。何れ後刻祈禱所で逢はう。急いて參れ。場所は祈禱所であるぞ、チユバル。

と兩人退場

第二場　ベルモント　ポルシア邸の一室

バッサニオ、ポルシア、グラチアノ、子リサ、及び從者登場

ポル　喃今少時お待ちなされませ。抽籤を餘所に、一兩日御逗留なされたとて、それが何の御差支になりませう。若しも籤をお抽き遊ばして、それが萬一外れもせば、最うこれが永久の訣別、二度とお目もじは協はぬ身。それ故何卒しばし思ひ留つて戴きますわいなア。戀の何のといふ意は微塵もなけれど、貴所樣とこのまゝ離れ〳〵になる氣はせぬ。お了解になりましたか。憎いと思はゞ、言ふまでもなく、斯かる事は申しませぬぞえ。それにしてもこれだけでは、若しやまだ貴所樣の、腑に落ちぬやも知れぬゆゑ――と申して、乙女のかなしさは、たゞくよく

よと胸に所思を疊むばかり。――喃バッサニオ樣、協ふことなら、倘ほ一二ヶ月の間、貴所さまをお留め申して、その後抽籤をして戴きたいとの、妾の願望にムりまする。何れを引けば當る、當らぬ、そを知らせんは易けれど、さありては立てし誓詞を破る道理、こればかりは言はれませぬ。言はねば貴所樣が御抽損じをなさらぬとも限りませぬ。若し左樣のことにもならば、縦令誓詞を破るとも、秘密を漏らしたらばと、後に後悔せんは必定。ホンに憎いは、貴所樣の御眼眸、その涼しいお目元に魅られしばかりに、妾の身は兩個に斷れ、半分は貴所樣のお側に迷ひ、他の半分は貴所さまのお膝元――アレ半分だけが自己の所有となつて居りまする。最も妾の所有なら、結局は又貴所樣の所有、この身一個は悉く貴所樣の所有てムんすぞいなア。さるにても眞正の主てありながら、中に妨害の關があるとは、何とまアある甲斐もなき浮世てムんせう。たゞこれゆゑに、貴所樣の御手に入るべき妾の身が、それなりになつて居るぞいな。若しも萬一として、抽かれし籤の外れもせば、言ふまでもなく、そは運の神の過失、妾の讒とは思召すな。アレ妾としたことが、つい浮々と長文句、お宥怒なされてくだされませ。詰りはこれも出來得るかぎり、時刻を延ばし隙を費して、貴所樣に抽籤をさせまいとの果敢ない願望。

バッサ　それは近頃迷惑、とく抽籤を許して戴きまする。今のまゝでは拷問臺に上されし苦痛、生きた心地は致しませぬ。

ポル　それならばお出でなされませ。妾の肖像は三個弁べたる手筥の一個に入れてムりまする。眞實貴所樣が、妾を愛しみてたもるなら、よも

抽損じはなさらぬ筈。さ、チリサ其外、何れも遠く離れて居や。シテ、バッサニオ様が籤を抽かるゝ間は、管絃を奏づるやう吩咐けるが善い。若し運拙く、抽きたる籤の外れもせば、音樂の妙なる聲に送らるゝ郎君の姿は、歌に消え入る白鳥の、末期のさまがさながらに偲ばれやう。（白鳥の死に瀕して歌ふことは古來よりの詩歌に見ゆ）折から溢るゝ妾の涙は瀑津瀬をあざむきて、浮きて流るゝ水鳥の、死の床にはよい配合。若し又籤が當るとせば、これにも音樂は無上の景物――新に國王の御座につく時には、有司百官音樂の囃子に連れて禮拜するとかや。又一生の晴れの結婚といふ日の朝ぼらけには、新郎の眠れる窓の下にて、琴瑟を掻き鳴らし、覺て嬉れしき大禮の當日を告ぐるとや。それにしても、アレ覽よ郎君のお姿の見事さよ。往古希臘の勇士アルシデーズがトロイの國に在りし時、犧牲として海神に供へたる、美女を取り戻したる折の姿もかくや。（アルシデーズは希臘のハーキュリイズ是也。トロイ王ラオメドン海神ポセイドンの感情を害するや、海神怒りて一個の怪物を送りて國土を刧掠す。トロイ人之をなだめんとして時々處女を怪物に供す。たま／＼アルシデーズ此國に過ぎるに當り、件の怪物を退治す）今妾の身は、さながらその犧牲の少女、又チリサ達は、件の怪物に愛娘を奪はれたる、トロイの女房どもが、怪物退治の首尾はいかにと、泣き腫らせる眼に眺め入りしに似もしやう。いざバッサニオさま、とく／＼抽かれよ。貴所様一人に死なせはせぬぞえ。それにしても、局に當る貴所樣よりも、それを眺むる妾の苦勞は又格別。

と樂聲起る。その間にバッサニオは筥につきて自問自答す

歌

浮氣といふはさて何んなもの、

胸に宿るか頭にあるか、
誰の手にかけ誰が培ふた。
　　　さア何うぢや〱
浮氣ア目のもの眼の芽生、
眼に見る中こそ枝葉も茂れ、
一と眼見ざればつい枯れ果てる。
　枯れた浮氣の野邊送り、
　何りや葬式の鐘撞かうか。
　　　さアぢやんぢや〱

一同　さアぢやんぢや〱。

メッサ　して見れば、外觀なるものは、些も當にならぬかも知れぬが、それに

も懲りず、世人は裝飾の爲めに欺かれて居る。例へば之を法律に見る——いかに無理非道の訴訟にても、美辭佞辯を以て、その罪惡の掩蔽されぬことはない。例へば之を宗教に見る——いかに擯斥すべき邪說にても、威容儼然たる老僧が、經典を楯にとり、尤もらしい難有味をつけて、その汚點を美衣の下に包み得ぬことはない。又いかなる惡漢も、その外貌に多少君子の假面を被らぬ程愚なるはなく、さてはかの、臆病未練の不覺者、砂もて築ける階段の、蹈めば崩るゝ不用骨を持ちながら、顎に生えたる虎髯の、威風をさ〱四邊を拂ひ、古昔の英雄豪傑にも、つや〱劣らぬ面魂をして居るもよく見受ける。但しその肚裏に立ち入れば、その肝臟は多く乳色、（往時の人士は勇氣は肝臟に在りと思惟せり。赤色を勇氣の證兆とせるは二幕第一場にも出てたり）その口邊の飾り物は、たゞ世の白痴を嚇かす爲めの

品に過ぎぬ。又かの美人といふも多くはこの類。美といふは、つまりその化粧品、秤器（はかり）にかけて賣買（うりかひ）が出來る。シテ其塗（ぬ）りたる鉛白（おしろい）の、目方が加はれば加はるほど、氣がフラ〳〵と浮くといふは、これは誠に天下の奇觀。又かの黄金（こがね）の髮（かみ）の房々（ふさ〳〵）と、風に戯れて波動（うねり）を作る風情（ふぜい）は、いかにも人の心をときめかせど、よく〳〵瞳を据ゑて見れば、それは彼（か）れる鬘（かつら）の毛、他人の頭（かしら）の讓り物。此毛を生（は）やせし正眞の頭は、とくの昔（むかし）に墓場の露、一片の髑髏（されかうべ）と化（ば）けて居ることが往々（まゝ）ある習ひ。是等を以て考ふれば、裝飾品といふものは、詰（つま）り、蹈むに危き深淵（ふち）の崖（がけ）、又蠻女の醜を包む錦繡。約めて言へば、狡猾なる時世（ときよ）が、智者賢者の嫌ひなく、一網にかけんための係蹄（わな）ぢや。かるが故に、汝燦爛たる黄金、飢ゑても齒の根（ね）は立たぬ食餌、汝（おのれ）に最早用（よう）はない。（フリジア王マイダスなる者、昔て故ありて、觸るゝ物皆黄金に化するの

バッサ「さァ余は之を選定致した…………」
ポル「さては！まァ何といふ今日のしあはせ…………」

（神力を授けられしが、唇に當れば食物まで黄金に化するに窮し、終にこれの神力の願下げをなせる古話あり）次ぎにその色生白く、平生人間の奴隷に甘ずる汝銀汝にも用はない。（銀は通例貨幣なるが故に此語あり）が、打ち見る所甚だいやしく、甘言を以て人を歡ばさむよりも、寧ろ冷々として人を威嚇するの風ある、汝鉛の手筥、汝の飾りなき點が、千百の甘言美辭よりも余の氣に入つた。さア余は之を選定致した。神も守れやわが身の幸を！

ポル　〔旁白〕さては！まア何といふ今日のしあはせ。迷ふ心の疑惑も、胸を痛めし失望も、戰慄ふ畏怖も、寂びしい眼光の吝氣の鬼も、一時にぱツと雲霞、手も舞ひ足も蹈み外す――ハテこりや愼まねばなるまい。うれしさに過ぎてはならぬ。控へやう、耐へやう。うれしさが勝ち過ぎる。嬉れしさに食傷らぬ用心せねばならぬ。

バッサ　さァこれは抑も何物ぢや？　と鉛の手筥を開く、

やッこれはポルシア姫の御肖像！似るも似たり、描くも描いたり。何所の名手がなせる業ぞ。あれ〳〵動くか、その瞳は？それとも我が瞳の上に映りて、動くが如く見ゆるのか。や、これなるは薫ばしき氣息の通ひ路、半ば開ける蕾の唇——イヤ開く筈ぢや。かくも涼しい氣息に打たれて、いかなる關の戸の開かずに居やう。ヤ、頭髮の中には、畵工の筆が蜘蛛の工を奪ひ、黃金の網を組み合はして居る。蚋を捕へる蜘蛛の巣よりも、さぞや男がかゝりもせむ。とりわけ優れしは左右の眼、畵工はよくも眼を開いて、かゝる兩眼を描きあげたもの。一方を描きあげる頃には、自己の兩眼が明を失ひ、ツイ竣工に及ばずして終りさう

なものぢや。が、これは又格別！（とポルシアに向ふ）わが形容の詞が、繪の眞價を損へるが如く、繪は又その御本體を損うて居る。おゝ爰に一片の卷紙がある。これぞわが幸運の總目錄。どりや——

外觀をたよるな、依とせずば、
運はお主の身について來る。
抽いて當てたるお主の運よ、
不足言ふまい、氣移りすまい。
中身のものが心に協ひ、
可愛のものと思召すなら、
共白髮まで添ふ仲ぢやもの、
しるしのキスを惜み玉ふな。